

b. 中街道遺跡

中街道遺跡は試掘結果から上層と下層の2面が想定されていたが、上層面の調査から、かなり早い時代に面的に大きく攪乱を受けている事が判明した。よってここでの事実記載は、下層で検出した遺構のものである。

遺構は、掘立柱建物2棟、溝16条、土坑77基、竪穴建物8軒、ピット119基、不明遺構2基を検出した。時期は、古墳時代初頭から江戸時代後期の遺物が見られ、遺構は古墳時代初頭と古墳時代後期、7世紀後半～8世紀初頭、11世紀代、12世紀～17世紀と5時期ほどの時代的なまとまりが見られた。

竪穴建物

SI1 (第22、24図参照)

遺構

C17 グリッドに位置する竪穴建物である。SX2、SD1、SK28、SK4、SK7 に切られ SK29 を切る。平面形は隅丸方形であり、長軸 4.5 m、短軸 3.2 m、深さ 0.26 mをはかる。床面は平坦であり、壁面は緩やかな立ち上がりとなる。壁際には周壁溝が見られるものの全周はせず、北西隅が空く。柱穴はなかった。火処は南側の SX2 に切られた部分で検出した。その形状から炉址と考えているが、出土遺物が7世紀代の尾張型甕と須恵器杯が出土していることから、SX2 によって竈の大部分が壊され、焚き口部分のみが残った可能性も考えられる。しかし、竈の袖などの残欠や支脚などは見られていない。

遺物は土師器甕や須恵器杯、蓋、山茶碗類などが出土しているが、炉内から出土した、濃尾型甕と須恵器杯から、7世紀代の竪穴建物と考えられる。

遺物

第24図-1・2の遺物は、須恵器、土師器である。1は須恵器杯で、底部を欠くが、傾き等から7世紀代のものと考えられる。2は土師器甕で、粗いハケ目が施される濃尾型である。7～8世紀頃のものであろう。

SI2 (第23図参照)

遺構

D15 グリッドに位置する竪穴建物である。遺構は調査区域外への広がりが見られた。遺構間の前後関係はSD2に切られ、SK22を切る形で検出した。平面形は隅丸方形であり、長軸は4.5 m、短軸は確認できる部分で2.4 m、深さは0.1 mであった。床面は平坦であり、壁面は緩やかに立ち上がる。柱穴や壁周溝は見られず、竪穴建物の東よりで、炭化物と微量ではあったが、焼土粒子を含む小さい穴を検出した。竈などの火処が見られないことから、これに類する施設と考えられる。

遺物は竪穴建物より、土師器 甕、須恵器杯、甕などの細片が出土した。

SI3 (第 23 図参照)

遺構

D16 グリッドに位置する竪穴建物である。遺構の大部分は調査区域外への広がりがみられた。遺構間の前後関係は、SD4.6、SK13、SP41.42.43 に切られる形で検出した。長軸は確認できた部分で 3.2 m、短軸 1.6 m、深さ 0.25 mをはかる。床面は平坦であり、柱穴や壁周溝、竈や炉跡などは見あたらなかった。

遺物は、古式土師器甕、高杯、土師器甕、須恵器、山茶碗類などが出土し、その出土状況も散発的でしかも小破片が多い。その事から混入の可能性が高く、遺構に伴う遺物の選別は極めて難しい。

SI4 (第 24、25 図参照)

遺構

C15 グリッドに位置する竪穴建物である。遺構は SI5 を切り、SX2、SD2、SD3、SD4、SD6- a、SD6- b、SK22、SK10 に切られる形で検出した。長軸 4.9 m、短軸 3.4 m、深さ 0.16 mをはかる。平面形は隅丸方形であり、床面は平坦となる。壁面は緩やかに立ち上がる。柱穴や壁周溝はなく、SI2 で見られた規模の小さい炭化物と微量の焼土を含む小さい穴を検出した。竈などの火処が見られないことから、これに類する施設と考えられる。

遺物は古式土師器甕や須恵器杯、甕、壺、横瓶、土師器、山茶碗類など見られ、特に床面直上からは横瓶が出土した。

遺物

第 24 図 - 3・4 の遺物は、須恵器である。3 は須恵器長頸壺の体部と見られるが、頸部・高台が欠損しており詳細は不明である。4 は横瓶の体部で、外面全体に叩きが施されている。こちらも口縁などを欠く破片資料であり、詳細は不明である。

SI5 (第 24、25 図参照)

遺構

C14 グリッドに位置する竪穴建物である。SX2、SI4、SD6- a、SP38、39 に切られる形で検出した。平面形は遺構間の切り合いが激しく、不明瞭ではあるが隅丸方形と考えられる。検出した規模は長軸 3.2 m、短軸 2.1 m、深さ 0.12 mであった。床面は平坦であり、柱穴や壁周溝などは見られず、竈や炉なども確認できなかった。

遺物は古式土師器甕、須恵器杯、甕、土師器、山茶碗類、陶器などが出土しその多くは流れ込みの遺物と考えられる。しかし床面直上より須恵器杯 B がほぼ完形で出土していることから 7 世紀代の遺構と考えられる。

遺物

第 24 図 - 5 の遺物は、須恵器杯である。床面直上から出土した杯 B で、体部内外面がロクロナデ、底部がロクロヘラ切りである。7 世紀後半頃のものである。

SI6 (第 24、26 図参照)

遺構

B5、B6 グリッドに位置する竪穴建物である。SP93 を切り、SD9 に切られる形で検出した。遺構の半分ほどは、調査区域外への広がりが見られ、確認できた範囲での長軸は 2.9 m、短軸 2.4 m、深さ 0.22 mをはかる。平面形は隅丸方形である。床面は平坦であり、硬化面などは見られず、全面貼床であった。竈を北側に設置し、壁周溝は全周せず北東側が開くかたちであった。この周溝は竈に切られていることから、竪穴建物を建てた段階で貼床をした後、竈より先に壁周溝を造ったか、また当初使用していた竈を廃棄して改めて竈を造ったためと考えられる。この竪穴建物の北東隅には、やや深いピット状の穴があったものの柱痕跡などはなかった。このピット状の穴は規模が小さく、場所的な観点から貯蔵穴などの施設の可能性も考えられるが、その用途は不明である。

遺物は古式土師器甕や高杯、土師器甕、山茶碗、小皿などが、竈や床面直上より出土している。また貼床部分からも土師器や須恵器小片が出土している。

遺物

第 24 図-6～8 の遺物は、古式土師器、土師器である。6 は古式土師器の S 字甕の口縁部で、頸部調整を持つことから C 類に分類される。編年的には、廻間Ⅲ式頃に位置づけられる。7 も S 字甕と見られるが、頸部付近のみの破片資料である。体部外面のヨコハケと頸部内面のハケ目から判断して、おそらく B 類であろう。そうであれば、廻間Ⅱ式頃のものである。8 は土師器の台付甕の脚台部である。ハケ目がなく、大きくハ字状に開くことから、S 字甕よりも新しい時期（宇田式期）のものと考えられる。

SI7 (第 24、27 図参照)

遺構

B7 グリッドを中心に位置する竪穴建物である。SK77 を切り、SK55、SI8、SD8 に切られる形で検出した。遺構は調査区域外への広がりが見られ、竈や炉などの火処の痕跡は見られなかった。

確認した範囲での規模は長軸 3.0 m、短軸 2.7 m、深さ 0.26 mをはかる。壁周溝は見られ、床面は平坦であった。貼床は見られなかった。

遺物は須恵器の壺甕や山茶碗類も見られたものの、主は古式土師器甕や高杯、壺などであり、壁周溝や床面直上からの出土であった。

遺物

第 24 図-9～12 の遺物は、須恵器、古式土師器である。9・10 は須恵器蓋で、両者ともつまみを欠くが、前者は 6 世紀頃、後者は 5 世紀末～6 世紀初頭に位置づけられる。11 は古式土師器壺の体部で、しもぶくれ状を呈すること等から、廻間Ⅰ式のものと思われる。12 は古式土師器の S 字甕の脚台部で、内面端部の折り返しが認められることから廻間Ⅱ式以降のものと思われる。

SI8 (第 24、27 図参照)

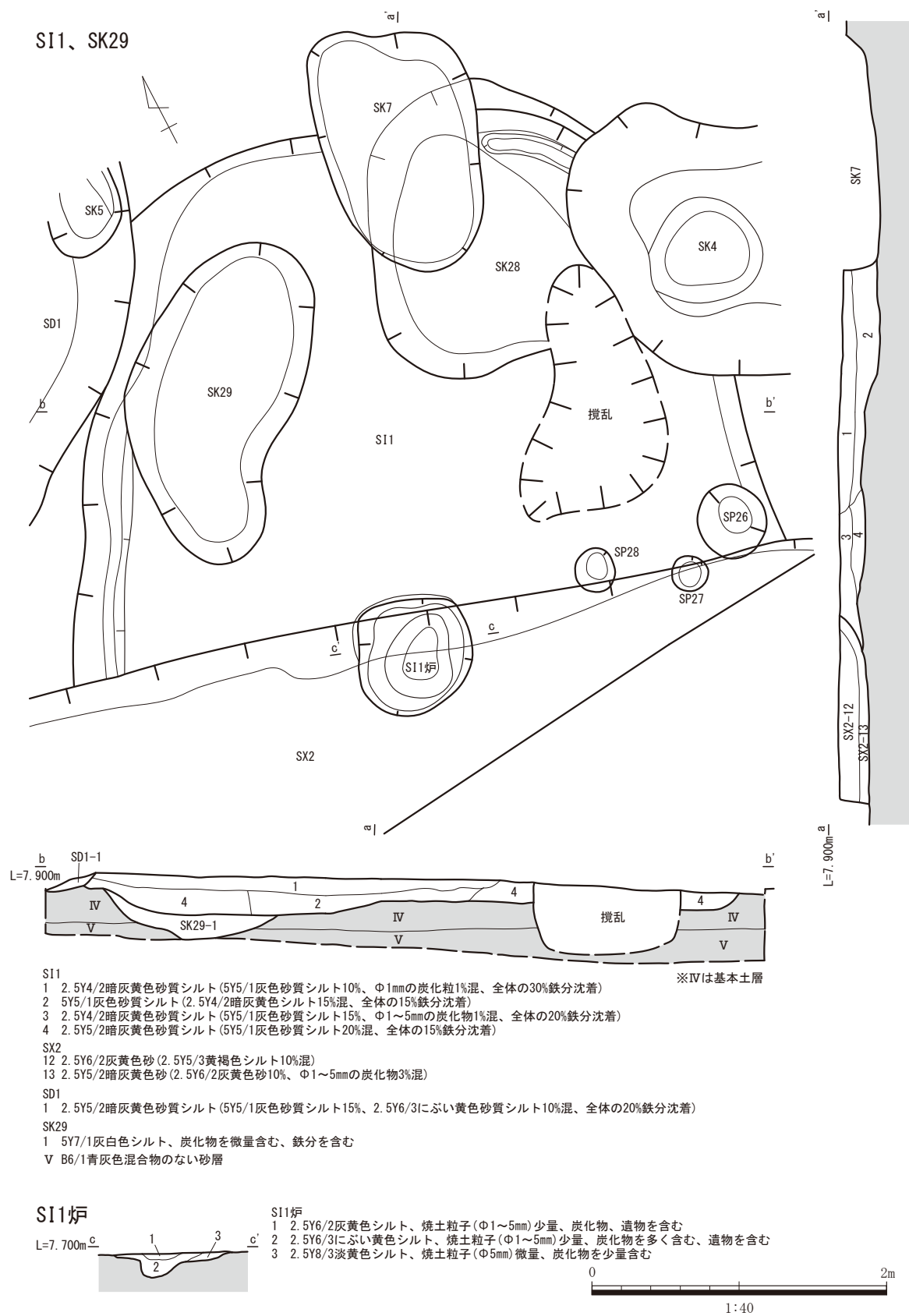
遺構

B6 グリッドに位置する堅穴建物である。SI7 を切り、SK58.59 に切られる形で検出した。長軸 3.4 m、短軸 2.4 m、深さ 0.54 mをはかる。平面形は隅丸方形であり、壁周溝や竈、炉などは見られない。床面は平坦となり、北半分が貼床となる。

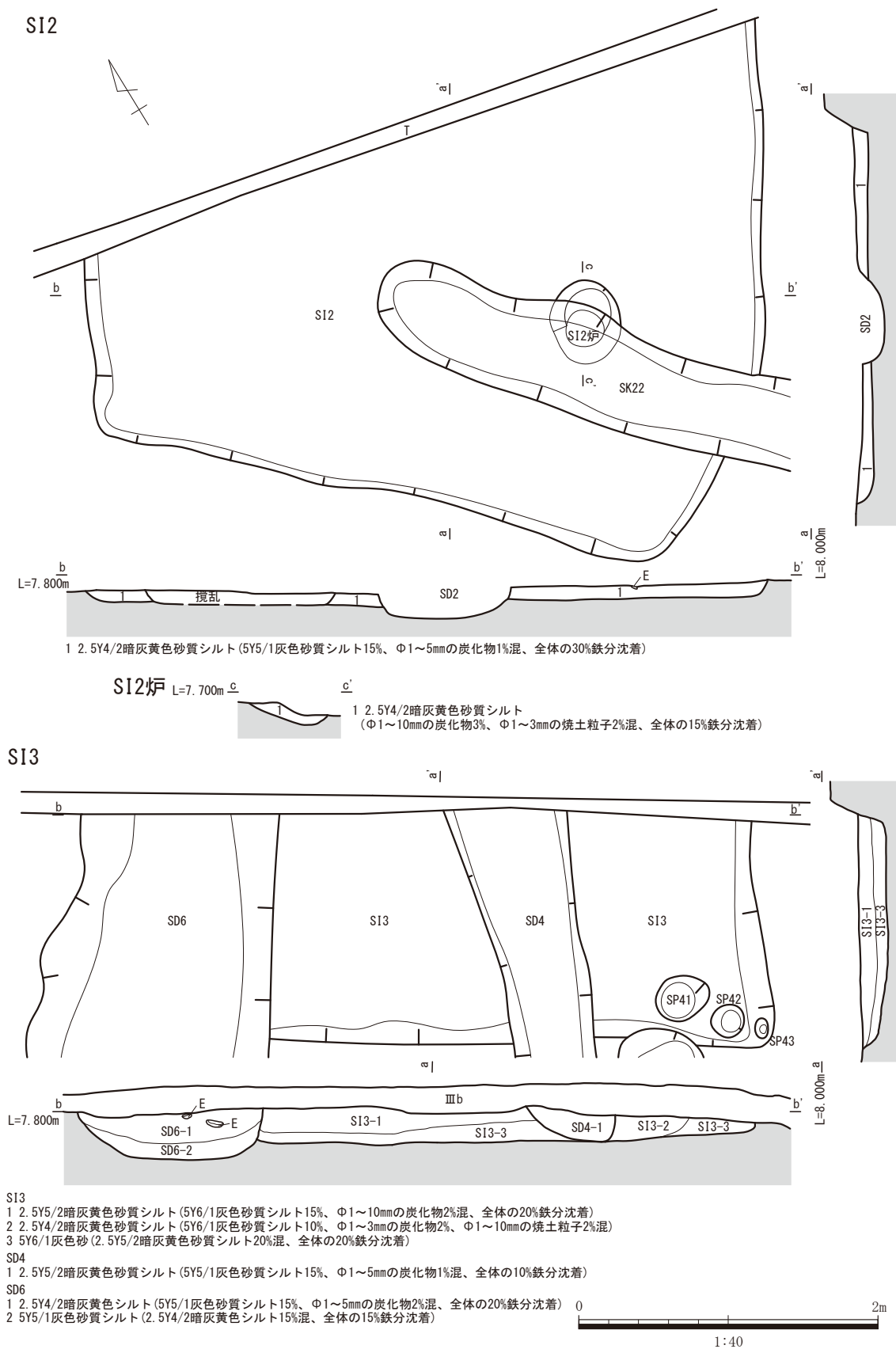
遺物は古式土師器甕、椀、須恵器甌、杯、山茶碗類などが出土しているが、上層から出土している遺物は、流れ込みの可能性が大きいと考える。床面直上では、須恵器甌や古式土師器椀などが出土し、床下からは古式土師器壺が口縁部が欠損しているが、潰れた形で出土している。

遺物

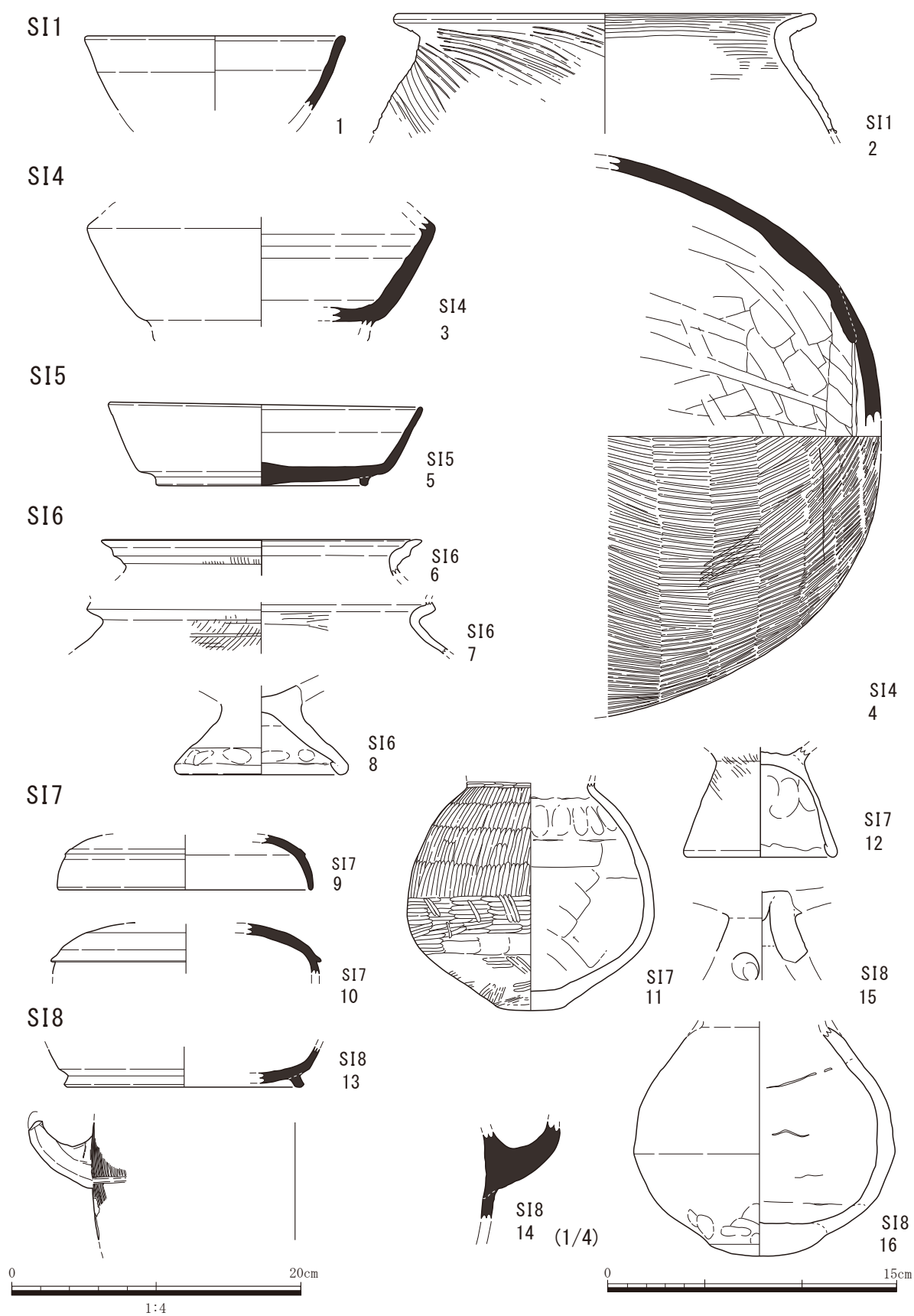
第 24 図 - 13 ～ 16 の遺物は、須恵器古式土師器である。13 は須恵器杯 B の底部で、8 世紀代のものと見られる。14 は須恵器甌の体部片で、外面に叩きが施される。15 は古式土師器高杯の脚部付近の破片資料である。残りが悪く詳細は不明であるが、廻間Ⅱ式以降の外反脚と見られる。16 は古式土師器壺の体部で、SI7 から出土したもの(11) に似ており、同じ廻間Ⅰ式頃のものか、下ってもⅡ式のものであろう。



第 22 図 中街道遺跡 S11、SK29 遺構図 (1:40)

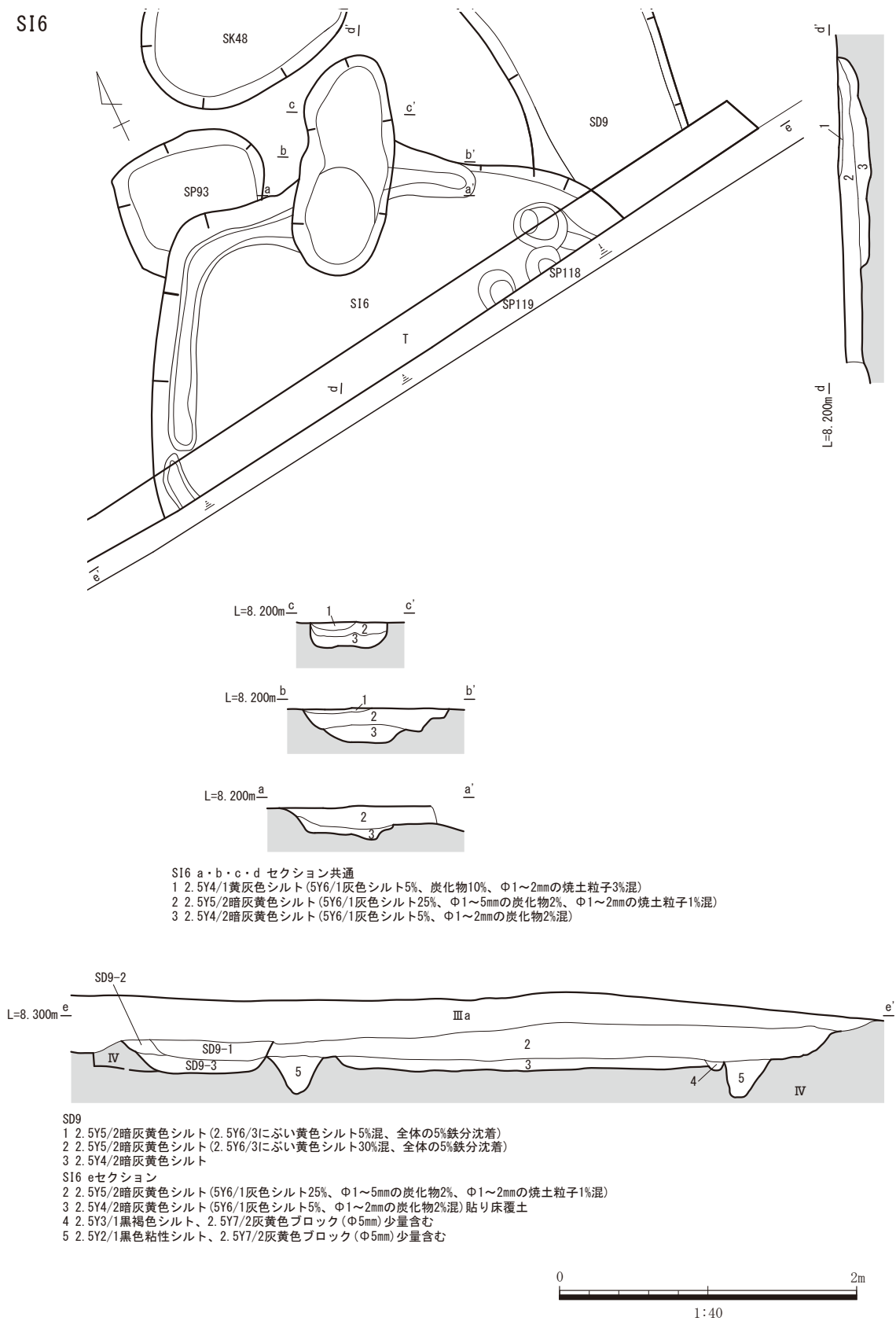


第23図 中街道遺跡 SI2・3 遺構図 (1:40)



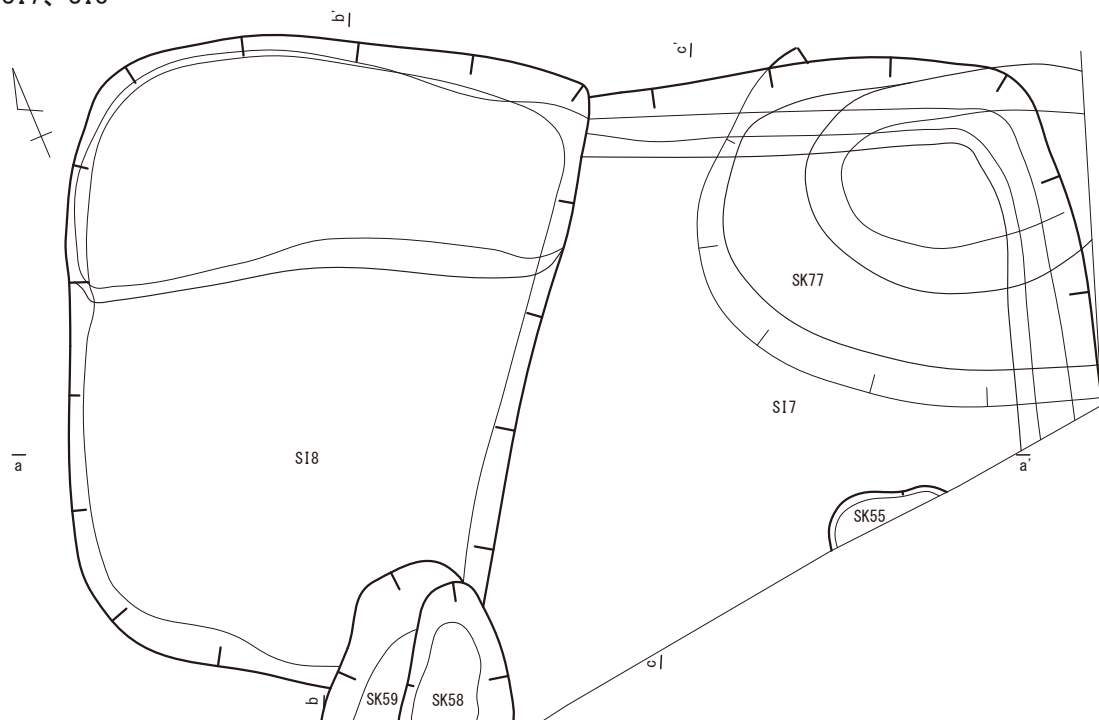
第 24 図 竪穴建物 (SI) 出土遺物実測図 (1:3、1:4)

SI6

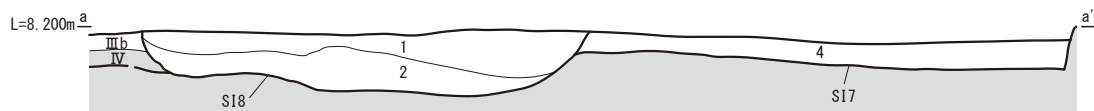


第 26 図 中街道遺跡 SI6 遺構図 (1:40)

S17、S18

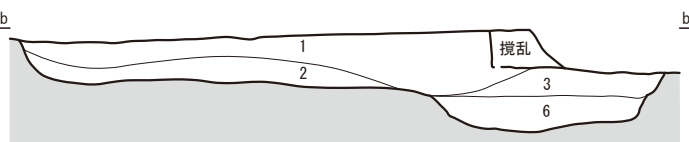


S17、S18



S18

L=8.200m

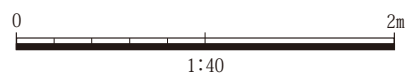


S17

L=8.200m



- 1 2.5Y4/2暗灰黄色シルト、2.5Y8/2灰白色ブロック(Φ5mm)を少量含む ※S18履土
- 2 2.5Y6/3にぶい黄色シルト、2.5Y7/4浅黄色ブロック(Φ10mm)を多く含む ※S18履土
- 3 2.5Y4/1黄灰色シルト、2.5Y7/4浅黄色ブロック(Φ10mm)を多く含む ※S18履土
- 4 2.5Y4/4オリーブ褐色シルト、5Y7/6黄色粒子(Φ10mm)を多く含む ※S17履土
- 5 5Y4/2灰オリーブ褐色シルト、5Y7/1灰白色ブロック(Φ10mm)を少量含む ※S17周溝
- 6 5Y3/1オリーブ黒色シルトと5Y5/2灰オリーブ色シルトが混在する層、床下土坑(貼り床か?)



第 27 図 中街道遺跡 S17・8 遺構図 (1:40)

掘立柱建物

中街道遺跡では掘立柱庭物は2棟確認している。いずれも側柱建物であり、1棟は、建物周辺で確認している区画溝と軸方向が同じに配置されていた。

SB1 (第 28 図参照)

遺構

B4、C4、B5、C5 グリッドに位置する掘立柱建物である。桁行き 2 間、梁行き 1 間の側柱建物となる。柱穴掘方は SP60、64、67、73、89、110 であり、平面形の多くは方形である。柱痕は SP64 と 73 で確認し、SP73 では柱木口が座っていた当たり部分を検出した。また柱抜き取り痕と考えられるものは SP60 で確認しており、柱はすべて立ち腐れしたものでなく、抜き取って廃棄した可能性が考えられる。掘立柱建物の敷地占有面積は 24 m²であり、軸方位は w-25° -e となる。これはすぐ西側を走る区画溝 SD7 とほぼ同じ方向であり、同時期存在の可能性も考えられる結果であると言える。切り合いは SP89、110 が SD9 に切られる形であった。

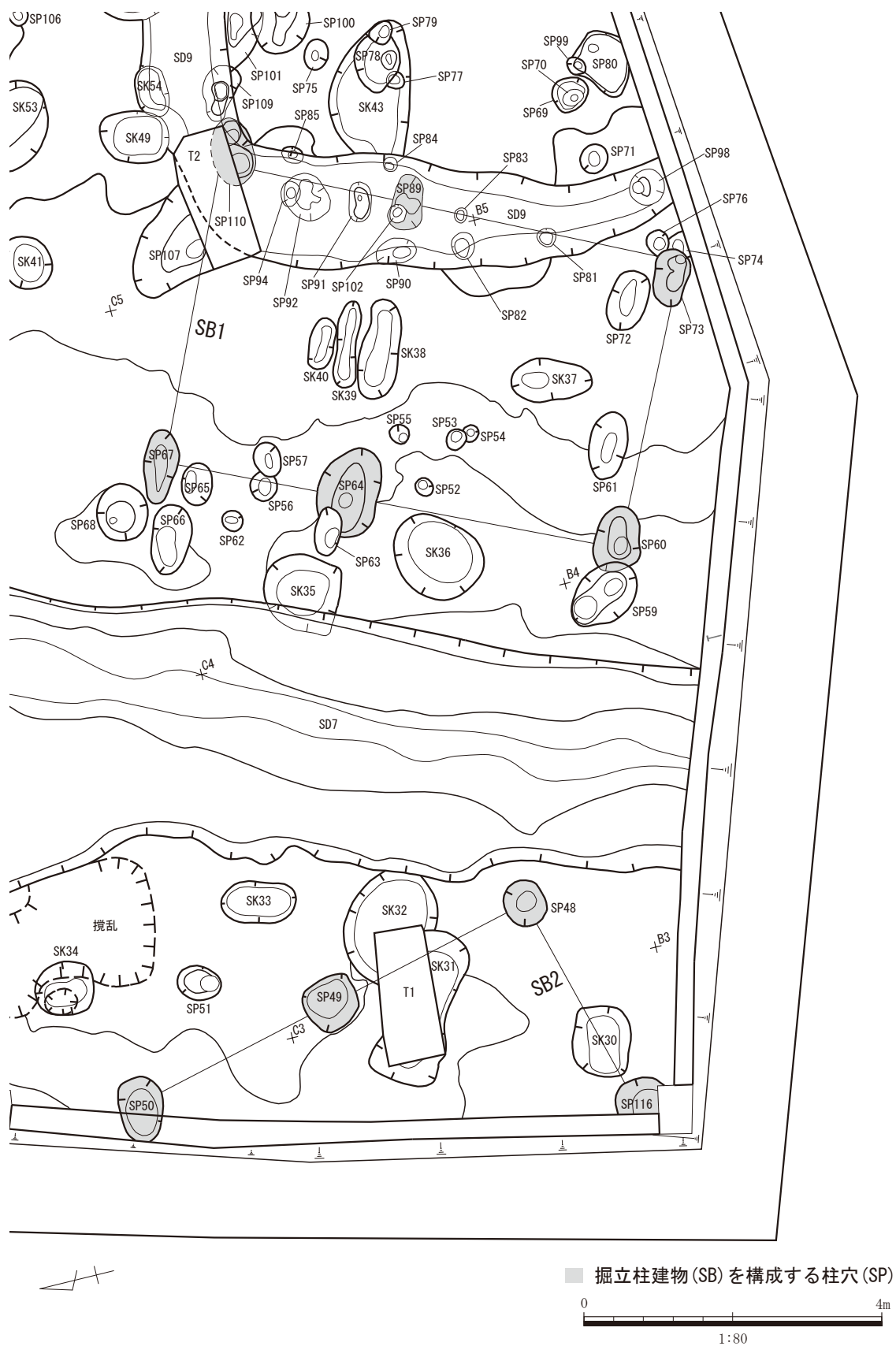
柱穴掘方からの遺物の出土は山茶碗類が中心であり、細片が多く時期特定には至っていない。

SB2 (第 28 図参照)

遺構

C2 グリッドに位置する掘立柱建物である。建物の大部分が調査区域外への広がりが見られることから、確認した規模は桁行き 2 間以上、梁行き 1 間以上の側柱建物となる。柱穴掘方は SP48、49、50、116 であり、平面形はほぼ方形である。柱痕や柱木口が座っていた当たり部分はなく、柱の抜き取り痕も見られなかった。建物の軸方位は e-10° -w となる。

遺物は SP49、50 から古式土師器、甕、須恵器、蓋、瓶類や壺、甕、山茶碗類が出土しており、遺物の多くは流れ込みの可能性が高い。



第 28 図 中街道遺跡 SB1・2 遺構図 (1:80)

溝

SD1 (第 7、29 図参照)

遺構

C16、D17 グリッドを中心に検出した溝である。南北方向へやや屈曲して向かう形で検出した。遺構間の前後関係は、SI1 を切り、SK5、8、9、SX2 に切られるものであった。上幅は 2.5 m、深さ 0.38 m をはかり、底面は南西側が緩やかな U 字状を呈しており、一部分では段を設けて深くする傾向が見られた。この深くなる部分からは、須恵器の甕片が出土している。堆積土は 1 層からなり、自然堆積であった。

遺物は古式土師器や須恵器甕、山茶碗類なども出土しているものの、遺物の出土層位などから、古代の頃の溝と考えられる。

遺物

第 29 図 -1 は土師器甕の口縁部である。頸部は、くの字に屈曲し内外面ともに強い刷毛目が見られる。2 は須恵器の甕であり、底部の一部から胴部のみの出土であった。胴部には叩きが施され、内面はナデとなる。

SD2 (第 7 図参照)

遺構

D15、C16、D16 グリッドで検出した溝である。ほぼ東西方向を向く遺構であり、南北方向に向かう多くの溝を切って立地している。上幅は 0.7 m、深さは 0.28 m をはかる。底面は平坦で箱形に近い断面形状である。堆積土は単層であり、出土遺物の多くが時期不明の須恵器甕の破片が中心であった。

SD3 (第 7 図参照)

遺構

C15、C16、D16 で検出した溝である。上幅は 0.4 m、深さ 8cm であった。SD1 とほぼ同じ方向を向くものの、遺構の深さも浅い上に遺物も古式土師器、須恵器、山茶碗などの小片が多く、時期不明である。

SD4 (第 7、29 図参照)

遺構

C15、D16 グリッドで検出した溝である。上幅 0.5 m、深さ 0.16 m であった。遺構は SK15 を避ける様に屈曲し、南へ向かうほど深さは浅くなる。遺構間の前後関係は SI3、SI4、SD3、SD6 - b などを切る形であった。底面は北側の深い所では U 字形で東壁側は緩やかな傾斜で上端に至る形であった。堆積土は単層であり、深さも浅いことから、出土遺物は流れ込みが多いと考えられる。

遺物は古式土師器なども出土しているものの、主は中世の遺物であった。

遺物

第 29 図 -3 ～ 6 は山茶碗の碗である。それぞれの時期は 6 の 13 世紀代から 4 の 13 世紀後葉～ 14 世

紀前葉頃、5の15世紀頃とばらばらである。7は古式土師器の高杯である。脚部はほとんど内湾せず外に開くものであり、廻間遺跡の6期、廻間Ⅱ式後半頃と考えられる。

SD5 (第7図参照)

遺構

C15、16グリッドで検出した溝である。SD1を切りSD2に切られる形で、上幅は1.4m、深さ0.27mをはかる。底面は浅い皿状を呈し、緩やかな傾斜で上端に至る。堆積土は2層である。

遺物は古式土師器から山茶碗まで細片ではあるが出土しており、時期不明である。

SD6 (第7、29、30図参照)

遺構

C14.15、D16グリッドを中心に検出した溝である。SK8やSK22などに切られ、SI3、SI4 SI5、SK15を切る形である。本溝は、当初SD6-aとSD6-bに分岐する遺構と思われたが、これらからの出土遺物から、SD6-aは7世紀後葉～8世紀前葉頃のもので、SD6-bは14世紀前半頃のものであることが判明した。元々あったSD6-aをSD6-bが踏襲したかどうかは、堆積土の堆積状況や切り合いの様子、さらに平面プランの違いからは確認できなかった。しかしここでは、a、bの別番号を付して捉える事としたい。SD6-aの上幅は1.2m、深さ0.28mをはかり、SD6-bの上幅は1.4m、深さ0.3mであった。堆積土はSD6-aは2層からなり、底面はやや深い皿状を呈している。それに比べSD6-bの堆積土は同じ2層であるものの、底面は平坦で、壁面は緩やかながら直線的に上端に至る形であった。

遺物はSD6-aで山茶碗なども見られたものの、主は須恵器蓋や杯Bなどであった。SD6-bでは陶馬や山茶碗類などが多く出土している。陶馬は遺構底面からの出土ではなく、上層よりの出土である。主体を占める遺物の山茶碗類の時期とは異なり、陶馬の出土事例が、飛鳥時代～平安時代に集中していることから、同時期でない可能性が高く、流れ込みが考えられる。

遺物

第29図のSD6-aの遺物は須恵器、土師器が主である。11、12、13は蓋である。11は蓋杯の蓋であり天井部の稜は明瞭には見られない。7世紀後葉前後と考えられる。14、15は杯Bであり、高台の断面形は長方形である。土師器は濃尾型甕(16.17)が見られる。第29、30図のSD6とSD6-bは須恵器甕なども見られたものの、主は中世となる。山茶碗の椀、皿は第30図-22、23の尾張型以外は東濃型であり、椀は第30図-20、21などの均質手が底径の小さく、高台は丸く紐状のものであった。皿は18、19などが見られ、見込みには大きな指ナデ痕が見られる。尾張型の椀はやや古い段階と見られるが東濃型の椀、皿は13世紀末葉～14世紀中葉前後頃と考えられる。

SD7 (第7、30図参照)

遺構

C3、D3グリッド周辺で検出した溝である。南東-北西方向へ向き、SK32、35などを切る。上幅は3.5

mであり、深さは0.38 mとなる。底面は皿状を呈し、溝の中心部分は一段深くなる。これは土層観察から、底さらいや、掘り直しなどが行われた結果であると考えられる。この様に中心部分が一段深くなる構造は、後述するSX2でも見られている。このSX2とは調査区内での接続は見られないものの、出土遺物の時代的な繋がりや遺構の軸方向などから同一の遺構の可能性が高いものと考えられる。SD7の堆積土は3層からなり、2層以外はほぼ自然堆積に近いものであった。

遺物は古式土師器から須恵器、山茶碗類、中世土師器皿、古瀬戸などが多数出土しているものの、山茶碗類では13世紀末～14世紀前半頃のものの中段部分で見られ、古瀬戸の卸皿などは、一段深い位置から出土していた。これら遺物は人為的に置かれたものではなく、散発的な出土であったが、おおよそその頃まではこの溝は完全には埋まらず開口していたと考えられる。

遺物

第30図の山茶碗類は、27、28、29、30などが出土している。遺物は尾張型の27、28などの5～6型式頃のものや、東濃型の13世紀末～14世紀前半頃のもので、高台は細く紐状の29の碗や、30の様に碗が皿形態になり全体的に丸みを帯び、口縁端部はやや直立する15世紀後葉（生田窯様式頃）のものなど、出土した山茶碗類には時代幅が見られる。古瀬戸では32の卸皿などが出土した。卸し目は深く鋭く刻まれ口縁部は丸味を持つ。古瀬戸前期の13世紀代のものと考えられる。31は青磁碗であり、鎬を有する蓮弁文を配したものであった。33は扁平片刃石斧であり基部が欠損したものである。

SD8（第7、31図参照）

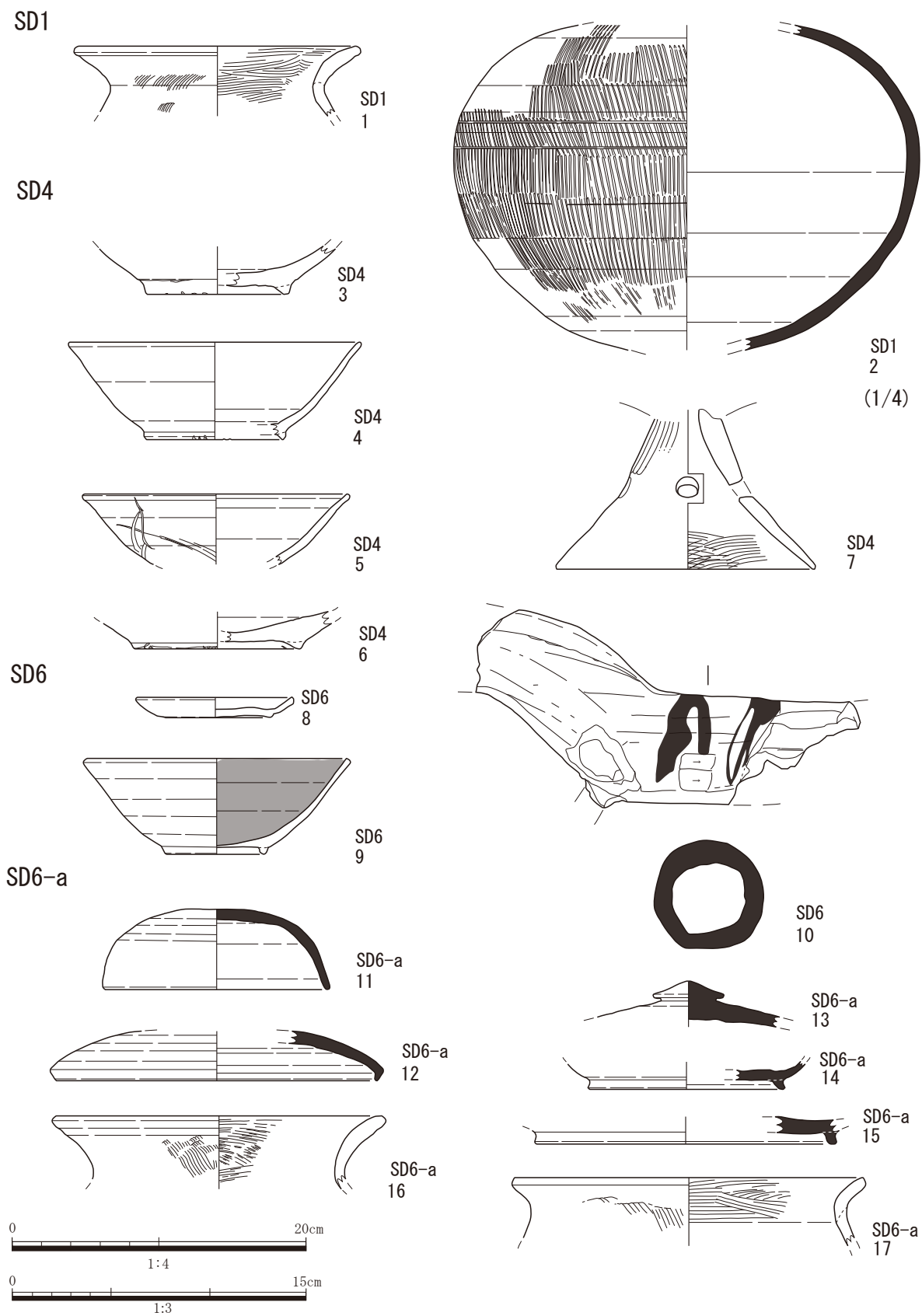
遺構

D5、6、C6～8グリッドに位置する溝である。SK56、62、65、69、70、76、SD11、12を切って検出した。上幅は1.4 m深さが0.48 mである。本遺構の北側を走るSX2とほぼ同じ方向に主軸を設け、SD11の平面プランの状況や形状、さらに土層観察などから元々はSD11と接続していた溝を、現在の形に付け替えている可能性が高い事がわかった。底面はやや深い皿状を呈し、上端へは東壁は直線的に立ち上がるものの、西壁は緩やかなものとなる。堆積土は3層からなる。

遺物は古式土師器や須恵器などが見られたものの、主は中世の山茶碗の細片や内耳鍋、中世土師器皿や古瀬戸などが中心であり、散発的な出土であった。

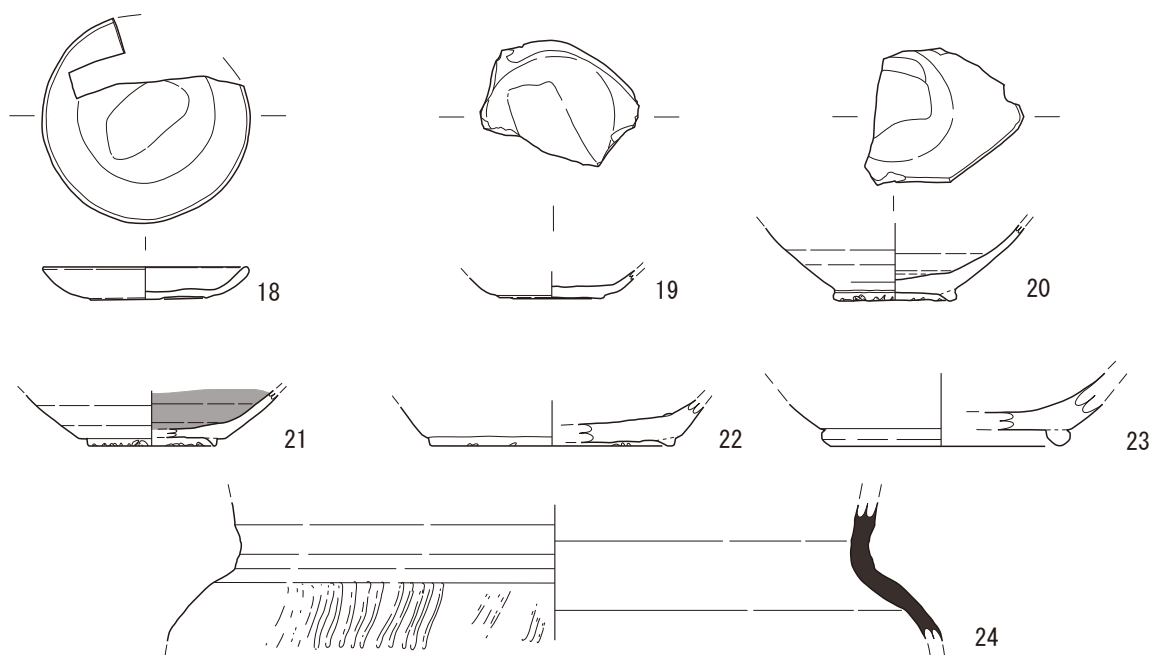
遺物

第31図の遺物は須恵器蓋、鉢、土師器甕、中世土師器皿、内耳鍋、羽釜、古瀬戸である。38の須恵器は底部が轆轤ヘラ切りとなり、体部は内湾し口縁端部は内斜する。39は濃尾型甕の底部であり、40は中世土師器皿となる。41、42は古瀬戸のすり鉢であり体部は鉄釉を施す。古瀬戸後期の15世紀代のものと考えられる。43は古瀬戸の折縁深皿であり、15世紀中葉～後葉頃と考えられる。

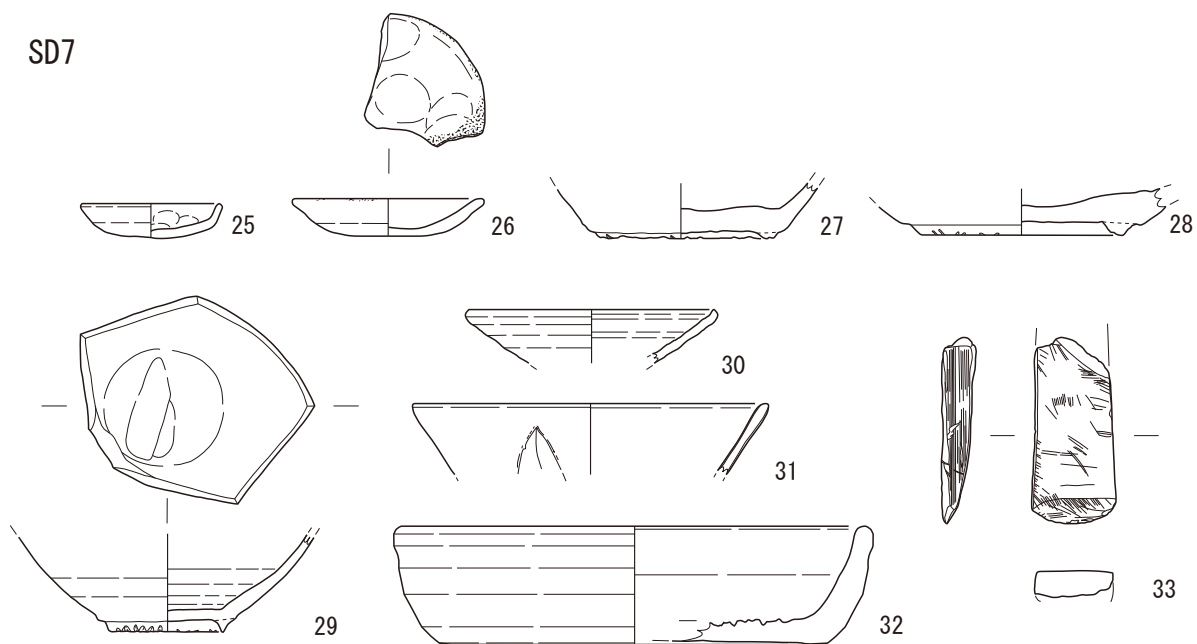


第 29 図 溝 出土遺物実測図 その1 (1:3,1:4)

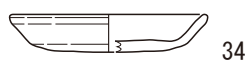
SD6-b



SD7



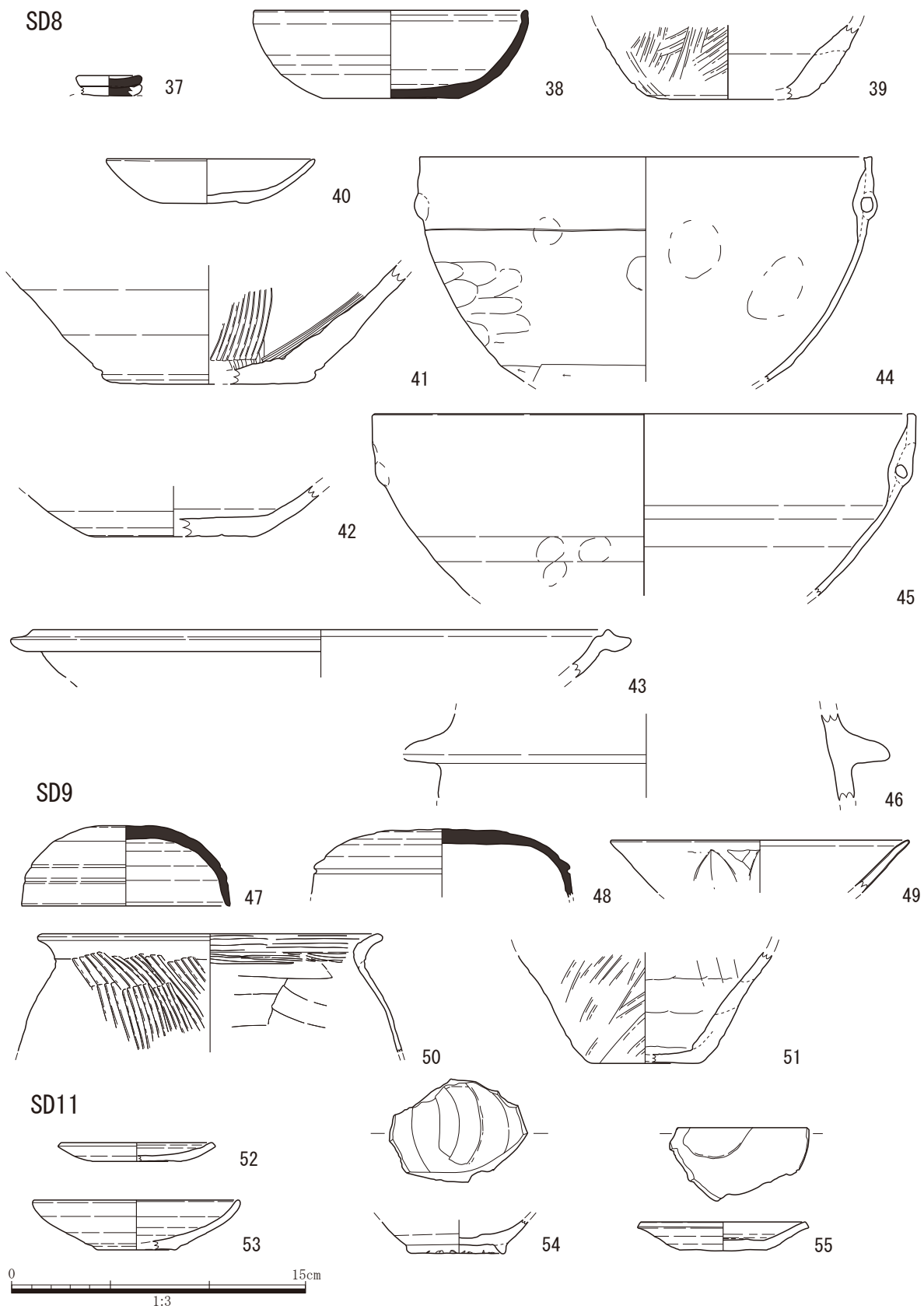
SD12



SD14

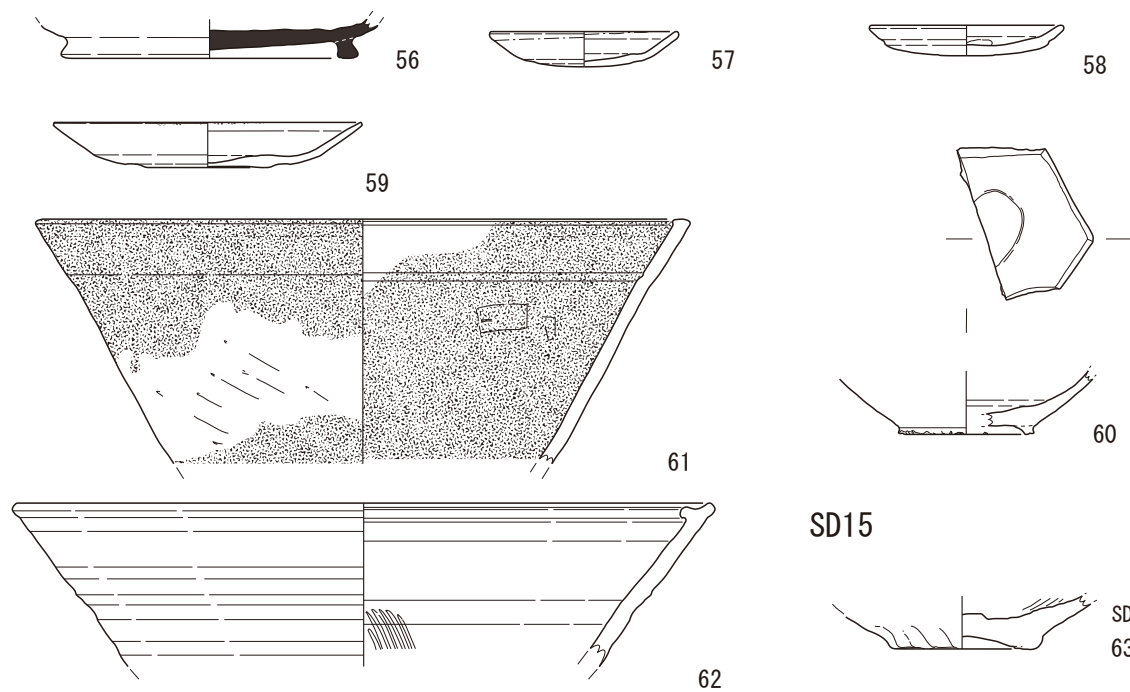


第 30 図 溝 出土遺物実測図 その 2 (1:3)

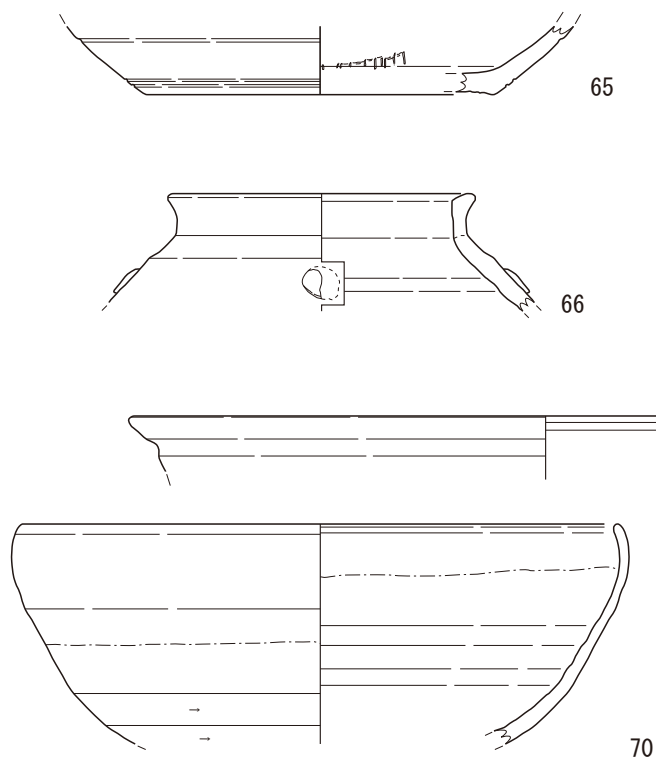


第31図 溝 出土遺物実測図 その3 (1:3)

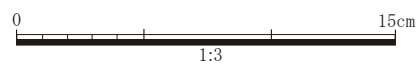
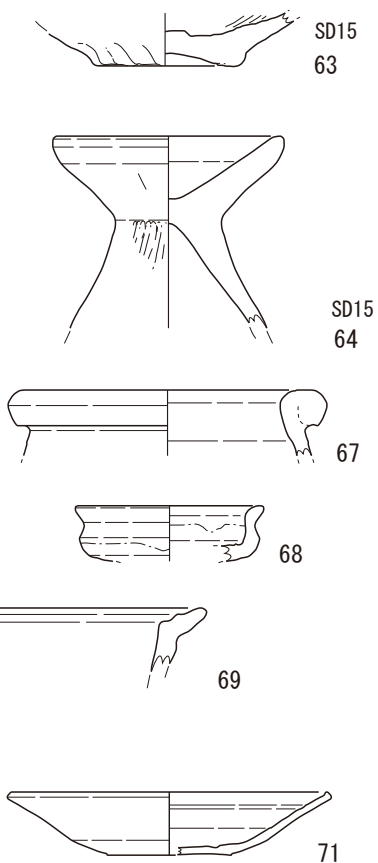
SD13



SD16



SD15



第 32 図 溝 出土遺物実測図 その 4 (1:3)

44、45、46 は内耳鍋と羽釜である。内耳鍋は体部が半球形のものであり、体部上半は指頭痕が顕著に見られ、下半にはヘラケズリ調整を施す。内耳は半球形で内側に張り出し、棒状工具によって孔を開けている。15 世紀後半～16 世紀代と考えられる。

SD9 (第 7、31 図参照)

遺構

B5、C5、B6、C6 グリッドに位置する方形区画溝である。上幅は 1.44 m、深さ 0.2 mをはかり、底面はやや深い皿状を呈し、底面から上端へは直線的に立ち上がる。堆積土は 3 層からなり、自然堆積であった。方形に区画された遺構の内側では、建物などの構造物の痕跡は確認できなかった。

遺物は古式土師器、須恵器、山茶碗、陶器などが見られたが、遺構の深さはさほどない。遺物の出土状況には規則性などは見られず、ほぼ散発的に破片が出土していた事などから、ほとんどは流れ込みの物であろうと考えられる。ただ出土した遺物量などから中心は山茶碗などを主とする中世の遺構と考えられる。

遺物

第 31 図の遺物は須恵器蓋、土師器甕、青磁碗である。47、48 は蓋杯であり、47 は球形の天井部に不明瞭ではあるが、稜が見える。端部は丸く収める。7 世紀代のものと考えられる。48 は天井部に轆轤ヘラケズリ痕が残り、明瞭な稜が見られる。端部は欠損していて不明であるが、6 世紀代のものと考えられる。50、51 は濃尾型の甕である。荒い刷毛目に底部内面には有段接合痕が見られる。8 世紀代と考えられる。49 は青磁碗であり、鎗蓮弁が見られる。

SD10 (第 7 図参照)

遺構

D5、D6 グリッドに位置する溝である。SK51、53、SP108 を切り、SK76、SD8 に切られる形で検出した。溝の上幅は 1.1 m、深さは 0.17 mであり、底面は平坦となる。上端へは直線的に立ち上がり、堆積土は 2 層からなる自然堆積であった。

遺物は古式土師器や須恵器、山茶碗などが出土しているものの、細片が多く、遺構に帰属する時期の遺物は皆無に近い。ただ須恵器の出土が量的に多く見受けられる点から、奈良平安時代頃の遺構の可能性も考えられる。

SD11 (第 7、31 図参照)

遺構

C7 グリッドに位置する溝である。SD8、SK42、52 に切られ、SD16、SK62 を切る形で検出した。上幅は 1.2 m、深さ 0.32 mであり、底面はやや深い皿状を呈し、溝の北側にはテラス状の小規模な平坦面を設ける。遺構の底面形状が SD8 へ伸びていることから、元々の流れは SD8 へ繋がっていたものが、ある段階で付け替えられた物であることがわかった。

遺物は古式土師器、須恵器、山茶碗などが出土している。ただほとんどが上層からの物であるため、流れ込みのものが多い。SD8 や後述する SK52 との前後関係から 15 世紀前半以前には廃絶していたものであろうと考えられる。

遺物

第 31 図の遺物は山茶碗類である。52、55 は小皿であり、ともに東濃型で、7～8 型式のものと考えられる。54 は椀であり、高台には刳殻痕が見られ、細い紐状のものである。小皿とはほぼ同じ頃のものと考えられる。53 は東濃型であり高台はなく平底化した椀である。体部は丸みを帯びる。11 型式、脇ノ島窯段階と考えられる。

SD12 (第 7 図参照)

遺構

C6 グリッドに位置する溝である。SD8、9、SK76 に切られ、SK64、SP111、115、117 を切る形で検出した。上幅 0.7 m、深さ 0.22 mをはかり、底面は平坦であり、断面形状は箱形であった。

遺物は古式土師器、須恵器、山茶碗、陶器の細片が出土している。

SD13 (第 7、32 図参照)

遺構

D11、E11 グリッドに位置する溝である。北東－南西方向に向き、SX2、SK66 を切る形で検出した。上幅 1.2 m、深さ 0.32 mをはかり、底面は U 字形を呈する。深さは南から北へ深くなる形であった。

遺物は古式土師器から山茶碗類、土師器皿などの細片が多く混在して出土し、溝の時期を遺物から確認するのは難しい状況であるが、SX2 との切り合い関係から 16 世紀以降の遺構と考えられる。

遺物

第 32 図の遺物は須恵器杯 B、中世土師器皿、山茶碗類、内耳鍋、古瀬戸である。特に中世の遺物が目立って出土しており、特に山茶碗類は 57、60 の様な小皿、椀が見られている。57 は口径が小さく底部は扁平となるもので、15 世紀後半頃、生田窯段階のものである。60 は古く 8～9 型式のものであり、高台は細い紐状のものとなる。底部内面には指ナデ痕が見られる。58、59 は中世土師器皿であり、58 は非ロクロとなる。59 はロクロ土師器で口縁端部には煤痕が見られる。灯明皿として使用されたものであろうか？ 61 は内耳鍋であり、62 は古瀬戸後期のすり鉢である。体部は直線的に開き、口縁端部には小突起が形成され口縁端部より低い位置に見られる。

SD14 (第 7、30 図参照)

遺構

D11 グリッドに位置する溝である。北東－南西方向に向き、SK66 を切り、SX2 に切られる形で検出した。上幅 0.56 m、深さ 0.24mをはかり、底面はやや深い皿状を呈する。底面から上端へは直立して立ち上が

り、規模などで類似する SD15 と平行して存在する。

遺物は中世のものが多く、散発的な出土であり人為的な配置などは見られなかった。

遺物

第 30 図の遺物は山茶碗類の椀 (35) と古瀬戸の瓶類 (36) である。山茶碗類の椀は尾張型であり、高台は丸味を帯びているものの断面三角形となり 5 型式～6 型式、12 世紀後葉～13 世紀前葉頃のものと考えられる。古瀬戸の瓶類は削り出し高台となり、灰釉で施釉されている。

SD15 (第 7、32 図参照)

遺構

D11 グリッドに位置する溝である。北東-南西方向に向き、SK66 を切る形で検出した。上端 0.6 m、深さ 0.4 m をはかり、底面はやや深い皿状を呈する。底面から上端へは直立して立ち上がり、前述した SD16 と平行して立地する。

遺物は古式土師器や須恵器などの出土もあったが、中心は中世であり、山茶碗や土師器皿、羽釜などが見られた。これらの出土状況は人為的に意図する様な出土のものは見られず、すべて散発的な出土であった。

遺物

第 32 図の遺物は古式土師器の甕か壺 (63) の底部と器台 (64) である。底部外面にはへら状工具よるナデ痕が見られる。器台はミガキが施されたものであった。廻間Ⅰ～Ⅱ式期頃か。

SD16 (第 7、32 図参照)

遺構

D7 グリッドに位置する溝である。遺構は南北方向から直角に東西方向へ向くコノ字の形で、SD11、SX2 を切る形で検出した。上幅 1.6 m 深さ 0.46 m をはかり、底面は、やや深い皿状を呈しており、底面から上端へは、直線的に立ち上がる。

遺物は散発的な出土で、人為的な配置などは見られない。山茶碗類や陶器が中心であり、陶器のすり鉢などからは 15 世紀代頃のものが出土している。

遺物

第 32 図の遺物は古瀬戸の遺物が中心であった。65 は卸皿であり、底部の器厚は薄いものであり、卸目は細い。66 は祖母懷壺であり、器面外面には鉄釉を施釉する。67 も祖母懷壺であり、口縁部は巻き込む形である。68 は袴腰形の香炉であり、鉄釉を施釉する。69 は折縁深皿の口縁部片であり、70 は手付き鍋片であろうか。これらは古瀬戸後期に入るものと考えられる。71 は脇ノ島窯段階と考えられる山茶碗の椀である。底部は平坦で器厚は薄作りとなり、口縁端部は方頭形で高台は無い形となる。

土坑

土坑は合計 77 基検出した。ここでは遺物の出土が定量ある、または遺構を特徴付ける出土がみられたものを中心に概観したいと思う。

SK1 (第 7 図参照)

遺構

C17 グリッドに位置する土坑である。SP2 に切られる形で検出した。平面形は不整形であり、長軸 1.2 m、短軸 0.5 m、深さ 0.09 mをはかる。堆積土は単層であり、遺物の出土はなかった。

SK2 (第 7 図参照)

遺構

C18 グリッドに位置する土坑である。SP17 に切られる形で検出した。平面形は楕円形であり、長軸 0.9 m、短軸 0.6 m、深さ 0.22 mをはかる。堆積土は 2 層からなる。

遺物は須恵器、山茶碗類、陶器と混在して出土しており、その出土状況から流れ込みの遺物と考えられる。

SK3 (第 7 図参照)

遺構

C17 グリッドに位置する土坑である。平面形は方形であり、長軸 1.0 m、短軸 0.9 m、深さ 0.14 mをはかる。堆積土は単層であり、遺物は古式土師器の甕が出土している。

SK4 (第 7 図参照)

遺構

B17 グリッドに位置する土坑である。平面形は隅丸方形であり、長軸 2.3 m、短軸 1.7 m、深さ 0.27 mをはかる。堆積土は単層であり、古式土師器甕や須恵器蓋、土師器甕、山茶碗類などが混在し出土している。遺物の出土量などから主は須恵器であろうと考えられるが、細片が多く時期不明である。

SK6 (第 7 図参照)

C17 グリッドに位置する土坑である。平面形は方形であり、長軸 0.9 m、短軸 0.7 m、深さ 0.2 mをはかる。堆積土は単層であり、古式土師器甕や鉄滓などが出土している。

SK8 (第 7、35 図参照)

遺構

C16 グリッドに位置する土坑である。SD1.2.5 を切る形で検出した。平面形は不整形であり、長軸 2.5 m、短軸 1.2 m、深さ 0.3 mをはかる。堆積土は単層であり、古式土師器の細片や須恵器甕片なども出土し

ているが、主となる遺物は中世のもので、山茶碗片を中心に出土した。さらに上層からのものではあるが、13 世紀代中葉～後葉の小皿（第 35 図 -1）の完形が出土した。

SK15（第 7、35 図参照）

遺構

D16 グリッド付近に位置する土坑である。SD2 と SD6-b に切られる形で検出した。長軸 1.7 m、短軸 1.5 m、深さ 0.34 mをはかる。平面形は楕円形であり、堆積土は単層であった。遺物は、須恵器杯、甕や山茶碗などが混在して出土しているものの、山茶碗などの出土量が目立って多い事と、遺構の切り合い関係から、中世段階の土坑と考えられる。

遺物

第 35 図の遺物は須恵器杯 A、山茶碗類などが見られた。2 は須恵器杯 A であり、底部はやや丸みを持ち、口縁端部へは直立気味に立ち上がる。7 世紀後葉頃と考えられる。3～6 は山茶碗類である。13 世紀代のものが中心である中で、4 は新しく 15 世紀代となる。

SK17（第 7 図参照）

遺構

D12 グリッドに位置する土坑である。SK16 を切る形で検出した。長軸 0.7 m、短軸 0.6 m、深さ 0.2 mをはかる。平面形は楕円形であり、古式土師器甕細片や須恵器細片などが出土していた。主たる遺物は古式土師器であり、時期も古墳時代初頭頃の遺構と考えられる。

SK18（第 7、35 図参照）

遺構

D12 グリッドに位置する土坑である。長軸 0.9 m、短軸 0.8 m、深さ 0.48 mをはかる。平面形は楕円形であり、堆積土は 2 層からなる人為堆積土である。底面は平坦であり、箱形を呈する。遺物は土師器甕、甗片、須恵器杯蓋、杯などを中心に出土した。遺構は 7 世紀後半～8 世紀初頭の頃のものと考えられる。

遺物

第 35 図 -7～11 の遺物は須恵器蓋、杯、甗、土師器甕、古瀬戸鉢である。7、8 は須恵器の蓋、杯であり、11 は甗となる。7 は、つまみ部分のみの出土であり、8 は杯 A となる。底部は丸味を持ちロクロナデが施される。これらは 7 世紀後半～8 世紀代のものと考えられる。11 は甗であり、底部片での出土であった。胴部には一部叩き痕も見られるがヨコナデを行い仕上げている。9 は古瀬戸の鉢であり、10 は濃尾型の甕である。

SK19 (第 7 図参照)

遺構

D12 グリッドに位置する土坑である。長軸 0.75 m、短軸 0.7 m、深さ 0.22 mをはかる。平面形は方形であり、堆積土は 2 層からなる。遺物は土師器甕や須恵器杯、甕などが出土し、これらから 7 世紀後半～8 世紀初頭頃のものと考えられる。

SK21 (第 7 図参照)

遺構

C13 グリッドに位置する土坑である。SE1、SX2 に切られる形で検出した。長軸 1.6 m、短軸 1.1 m、深さ 0.4 mをはかり、平面形は方形である。堆積土は 2 層からなり、遺物の多くは、散発的に破片が 1 層から出土した。よって遺構に伴うものである可能性は極めて少なく、SE1 や SX2 からの流れ込みの可能性が高い。遺物は古式土師器甕、高杯、須恵器、土師器、山茶碗類などが見られた。

SK23.24 (第 7 図参照)

遺構

D13 グリッドに位置する土坑である。SK23 が SK24 を切る形で検出した。SK23 の長軸は 1.1 m、短軸 1.0 m、深さ 0.14 mをはかり、SK24 は長軸が 0.9 m、短軸 0.7 m、深さ 0.17 mとなる。平面形はともに方形であり、古式土師器、台付き甕などの細片などが遺物の主を占め、ほかに須恵器、杯や蓋なども見られた。古墳時代初頭頃の遺構と考えられる。

SK25 (第 7、35 図参照)

遺構

C12、C13 グリッドに位置する土坑である。SX2 に切られて検出した。長軸 4.5 m、短軸 2.0 mをはかり、平面形は方形である。堆積土は焼土、炭化物がブロック土とともに多量に含むものであったが、遺構の底面や壁面などには焼成痕は認められず、堆積状況と合わせて考えると別の場所で発生した灰などを、ここで廃棄した廃棄土坑と考えられる。遺構西側では、土坑が連続する様に掘られた部分が見られたものの、堆積土は遺構内全般を通して同じものであり、一連の掘削行為の範疇のものと考えられ、これらも廃棄土坑の一部である可能性が考えられる。

遺物は古式土師器甕・高杯、須恵器蓋・鉢・甕・壺、山茶碗類、陶器、不明土師器、白磁片などが見られたが、遺物の主立ったものは須恵器であり、遺物から 7 世紀末～8 世紀代のものと考えられる。

遺物

第 35 図 -12 ～ 17 の遺物は須恵器蓋、杯、小型壺、古式土師器台である。須恵器蓋 (12) はかなり緩いかえりが付き、つまみは欠損して無い。また扁平な天井部のもの (13、14) なども見られた。杯 (15) は白色となり、焼成不良である。古式土師器の器台 (17) は二段に透かし孔が入る。

SK28 (第 7 図参照)

遺構

B17 グリッドに位置する土坑である。SI1、SK4、SK7 に切られる形で検出した。長軸 2.0 m、短軸 1.3 m、深さ 0.33 mをはかり、平面形は方形である。堆積土は 2 層からなる自然堆積土であった。

遺物は廻間Ⅱ式段階頃と考えられる古式土師器甕・高杯などを中心に、須恵器、土師器片なども見られた。

SK29 (第 7 図参照)

遺構

C17 グリッドに位置する土坑である。SI1 に切られる形で検出した。長軸 2.2 m、短軸 1.1 m、深さ 0.48 mをはかる。平面形は不整形であり、古式土師器の細片が出土している。SK28 に近い位置に立地し、同様な遺物が出土していることから、同時期の遺構と考えられる。

SK31 (第 7 図参照)

遺構

C2、C3 グリッドに位置する土坑である。SK32 を切る形で検出した。長軸 2.1 m、短軸 0.9 m、深さ 0.39 mをはかる。平面形は方形であり、堆積土は 2 層からなり人為堆積であった。底面は平坦で、壁面も直線的な傾斜で立ち上がる。

遺物は散発的な出土で、意図的な出土のものはなく、流れ混みの可能性の高い遺物と考えられる。遺物は古式土師器の台付甕片や須恵器蓋、杯、古銭などが出土した。

SK32 (第 7 図参照)

遺構

C3 グリッドに位置する土坑である。SK31、SD7 に切られる形で検出した。長軸 1.5 m、短軸 1.2 m、深さ 0.23 mをはかる。平面形は楕円形であり、遺物の出土はなかった。

SK35 (第 7 図参照)

C4 グリッドに位置する土坑である。SD7 に切られる形で出土した。長軸 1.0、短軸 0.9 m、深さ 0.23 mをはかり、平面形は方形である。堆積土は 2 層からなり、自然堆積である。

遺物は須恵器が主で甕などの破片が下層から見られ、上層では、山茶碗の小皿などが出土している。

SK36 (第 7 図参照)

遺構

C4 グリッドで検出した土坑である。長軸 1.3 m、短軸 1.0 m、深さ 0.28 mをはかる。平面形は楕円形であり、堆積土は 2 層からなる。遺物は古式土師器甕や須恵器、土師器などの細片が出土しているが、流れ込みの可能性が高く、遺構の時期の特定までには至っていない。

SK41 (第 7 図参照)

遺構

D5 グリッドに位置する土坑である。長軸、短軸ともに 0.7 m、深さ 0.21 mをはかり、平面形が楕円形である。堆積土は 2 層からなる自然堆積土であり、上層からは須恵器なども出土しているものの、主として古式土師器、甕の細片が中心であった。

SK42 (第 7、35 図参照)

遺構

C7 グリッドに位置する土坑である。SD11、SK52、SK62、SK70 を切る形で検出した。平面形は隅丸方形であり、長軸 2.0 m、短軸 1.4 m、深さ 0.18 mをはかる。堆積土は 2 層からなり、底面は比較的平坦であった。

遺物は古式土師器の甕の細片や須恵器片なども見られたものの、中心は山茶碗類や陶器であり、時期は 15 世紀代のものが見られた。

遺物

第 35 図 -18 は山茶碗類の碗で東濃型である。体部は丸味を持ち、口縁端部はやや上方へつまみ上がる形であった。15 世紀代と考えられる。

SK43 (第 7、35 図参照)

遺構

C5 グリッドに位置する土坑である。SD9、SP77、78、79 に切られる形で検出した。平面形は不整形であり、長軸 1.7 m、短軸 1.1 m、深さ 0.12 mをはかる。堆積土は単層であり、遺構の浅さから考えて遺物のほとんどが、流れ込みの可能性が高い。

遺物は古式土師器 S 字甕・高杯・須恵器蓋・杯 B、山茶碗、不明土師器などの細片が出土した。

遺物

第 35 図 -19、20 の遺物は古式土師器甕、高杯である。19 はいわゆる S 字口縁甕であり、頸部から離脱してタテハケが施され、胴部上半部ではヨコハケが見られる。小型品であり、付近の遺跡では北島白山遺跡でも同様な遺物が見られた。廻間Ⅲ式期頃と考えられる。20 の高杯は杯部が大きく外傾する。廻間Ⅱ～Ⅲ式期頃と考えられる。

SK45 (第 7 図参照)

遺構

C6 グリッドに位置する土坑である。SD9、SP96、97 を切り、SK46 に切られる形で検出した。平面形は隅丸方形であり、長軸 1.4 m、短軸 1.0 m、深さ 0.37 mをはかる。堆積土は 3 層からなり、2.3 層は自然堆積層であるものの、1 層は人為堆積となる。底面は平坦であり、遺物は古式土師器片なども出土し

ているものの、遺物量や出土層位などから中心となるものは山茶碗類を主とする中世の遺物である。遺物は破片ばかりながらも 14 世紀代であり、その段階には埋め戻された遺構であろうと考えられる。

SK46 (第 7 図参照)

遺構

C5、C6 グリッドに位置する土坑である。SD9、SK45、47、48、SP97 を切る形で検出した。平面形は方形であり、長軸 2.3 m、短軸 1.6 m、深さ 0.24 mをはかる。堆積土は単層で地山由来のブロック土が入る人為堆積土である。

遺物は古式土師器甕片、須恵器甕片・蓋、山茶碗類、陶器、土師器などが出土したが、人為堆積土中からの散発的な出土で、多くが破片であったことから遺構内への流れ込み遺物の可能性が高い。しかし遺構間の切り合い関係から、中世段階の遺構と考えられる。

SK47 (第 7 図参照)

遺構

C5、C6 グリッドに位置する土坑である。SK46 に切られる形で検出した。平面形は方形であり、長軸 2.0 m、短軸 0.9 m、深さ 4 cmをはかり、堆積土は 2 層からなる。層厚が無いいため自然堆積がどうかは不明であるが、SK46 の一回り小さい遺構の様に検出したことから判断して、時期的には両者は近い時期のものである可能性も考えられるが、しかし本遺構からは古式土師器 S 字甕、須恵器、土師器、灰釉陶器などが出土し遺構の時期は不明と言わざるを得ない。

SK48 (第 7 図参照)

遺構

C5 グリッドに位置する土坑である。SK46 に切られる形で検出した。平面形は方形であり、長軸 1.4 m、短軸 1.3 m、深さ 0.13 mをはかる。堆積土は 2 層からなり、1 層目の底面が水平堆積に近いことから、人為堆積であった可能性も考えられる。遺物は古式土師器甕片なども出土しているが、山茶碗類の細片が主であり、14 世紀頃のものが見られた。

SK49 (第 7、36 図参照)

遺構

C5 グリッドに位置する土坑である。SD9 に切られる形で検出した。平面形は楕円形であり、長軸 0.9 m、短軸 0.7 m、深さ 0.13 mをはかる。堆積土は 2 層からなり、焼土や炭化物を含む人為堆積土である。壁面などには火熱を受けた痕跡はなく、別の場所に出た焼土などを埋め戻し土として使用したのと考えられる。

遺物は古式土師器の甕片や須恵器、土師器甕などが見られた。遺物の主は土師器甕であり、濃尾型甕(第 36 図 -21) などが見られていることから、7 世紀前後の遺構と考えられる。

SK50 (第 7、36 図参照)

遺構

C5 グリッドに位置する土坑である。SD9 に切られる形で検出した。平面形は楕円形であり、長軸 1.0 m、短軸 0.7 m、深さ 0.22 mをはかる。堆積土は単層であり、遺物は古式土師器甕細片とともに須恵器杯B (第 36 図 -22) が出土した。7 世紀後半～8 世紀前半頃の遺構と考えられる。

SK52 (第 7、33、36 図参照)

遺構

C7 グリッドに位置する土坑である。SD11、SK42 に切られる形で検出した。平面形は楕円形であり、長軸 3.4 m、短軸 1.9 m、深さ 0.58 mをはかる。堆積土は 3 層からなり、水平堆積を呈する人為堆積土である。水などを溜めた痕やグライ化した土壌などは見られなかった。底面はやや深い皿状を呈し、遺構の中心は楕円形に、やや深くなる。壁面は北側でテラス状に一段平坦面を作り、西側では、少し隅丸方形形状に突出した部分が見られる。

遺物の出土は極めて少なく天目茶碗が 2 層より 1 点出土したのみであった。天目から、大窯 I 期頃の 15 世紀末～16 世紀代には埋没した遺構であることが考えられる。

遺物

第 36 図 -23 は施釉陶器の天目茶碗である。器面にはあめ釉が施釉され、高台は削り出し高台となる。底部から口縁端部へは弓形を呈し、口縁部付近でやや外反する。

SK53 (第 7、33、36 図参照)

遺構

D5 グリッドに位置する土坑である。SD10 との前後関係は不明である。平面形は隅丸方形であり、長軸 1.7 m、短軸 0.9 m、深さ 0.41 mをはかる。堆積土は 3 層からなり、2.3 層は自然堆積土であり、1 層は人為堆積土となる。よって掘削され、一定期間使用、又は放置された後人為的に埋められた遺構であると言える。

遺物の出土状況は散発的であり、意図的に「置く」などと言った状況はなく、堆積土の下層から S 字甕と共に山茶碗などの細片が多く見られた。また 1 層より灰釉陶器が破片ながらも集中し、固まった形で出土していることから、遺物の多くは、遺構の埋め戻し時に土砂と同時に、混入した遺物の可能性が高いと考えられる。

ちなみにこのグリッドの周辺の遺物包含層からは、灰釉陶器が比較的目的目立って出土しており、本遺構で灰釉陶器が見られたのも、それとの関係が考えられる。

遺物

第 36 図 -24、25 は灰釉陶器の深碗である。24、25 ともにつけがけによる施釉であり、高台は縦長となり、

やや内湾する。体部は下半では張りが見られ、上半は直線的に立ち上がる。高台裏の糸切り痕はナデ消されている。H72 窯式並行期頃・S27 窯式段階頃と考えられる。

SK55 (第 7 図参照)

遺構

B7 グリッドに位置する土坑である。SI7 を切って検出した。平面形は楕円形であり、長軸 0.6 m、短軸 0.2 m であり、堆積土は単層であり、焼土、炭化物が多量に混入する層である。壁面などには火熱を受けた痕跡などはなく、灰などを廃棄した遺構と考えられる。

遺物は古式土師器高杯などの細片が出土している。

SK56 (第 7 図参照)

遺構

C7 グリッドに位置する土坑である。SD8 に切られる形で検出した。平面形は楕円形であり、長軸 1.0 m、短軸 0.8 m、深さ 0.34 m をはかる。堆積土は 2 層からなり、2 層は遺構の肩部崩落土の自然堆積土であり、1 層は人為的な埋め戻し土となる。1 層からは焼土、炭化物が少量ではあるが含まれていた。

遺物は須恵器なども含まれているものの、山茶碗類が中心であった。ただし細片が多く、時期不明である。

SK57 (第 7、36 図参照)

遺構

C6 グリッド付近に位置する土坑である。SD9、SP95 に切られる形で検出した。平面形は楕円形であり、長軸 1.0 m、短軸 0.9 m をはかる。

遺物は遺構底面からの出土であり、須恵器で 5 世紀末～6 世紀前半頃の杯 H の杯身 (第図 36-26) が出土している。

SK61 (第 7、36 図参照)

遺構

E11 グリッドに位置する土坑である。遺構は調査区域外への広がりが見られ、平面形は方形である。長軸は 1.5 m、短軸 0.9 m、深さ 0.32 m をはかり、堆積土は炭化物や焼土を含む 2 層からなる人為堆積であり、埋め戻し土と考えられる。壁面などには火熱の痕はなく、底面は平坦である。

遺物は古式土師器甕片や須恵器壺、山茶碗類、陶器などの細片が出土しているが、混入の可能性が高いため遺構の時期は不明である。

遺物

第 36 図 -27、28、29 は、山茶碗類の小皿と古瀬戸の皿、桶である。27 は東濃型の山茶碗類の小皿であり、底部は平坦で回転糸切り未調整である。口縁端部は直立し、器高も低い。生田窯段階の 15 世紀後半、11 型式頃と考えられる。28 は古瀬戸の灰釉皿である。体部下半は露胎となる。内面は口縁端部

に灰釉が施釉されるがほかは無釉となる。古瀬戸後期の15世紀代と考えられる。29は古瀬戸の桶である。口縁端部は水平に外折れする。体部下半は丸味をもって底部に至る。体部上方には粘土紐によるつ手が付くが一部欠損した形であった。体部外面は焼成不良によって色調変化している鉄釉が、体部中位まで施釉されている。古瀬戸後期の15世紀中葉～後葉頃と考えられる。

SK63 (第7図参照)

遺構

D10 グリッドに位置する土坑である。平面形は方形であり、長軸 0.7 m、短軸 0.6 m、深さ 0.3 mをはかる。堆積土は炭化物、焼土を含む2層で、層厚があり水平堆積であることから人為堆積と考えられる。

遺物は古式土師器甕片や須恵器杯B、山茶碗類などが出土しているが、遺構に伴うものではなく、混入の可能性が高いと考える。

SK66 (第7図参照)

遺構

E11 グリッドに位置する土坑である。SK71、72を切り、SD13に切られる形で検出した。長軸 1.3 m、短軸 0.9 m、深さ 0.15 mをはかり、堆積土は単層であった。

遺物は古式土師器甕片や須恵器杯B、山茶碗類などが出土しているが、混入の可能性が高い。

SK67 (第7、34、36図参照)

遺構

D11 グリッドに位置する土坑である。SD15、SK68を切る形で検出した。平面形は不整形であり、長軸 2.4 m、短軸 1.2 m、深さ 0.3 mをはかる。堆積土は2層からなる人為堆積である。

遺物は古式土師器片や須恵器、山茶碗類、土師器皿、内耳鍋、古瀬戸などが出土した。古式土師器や須恵器は混入遺物であり、遺物の中心は中世である。特に山茶碗の小皿と土師器皿は大量に廃棄された形で出土したことから、廃棄土坑と考えられる。廃棄されていた山茶碗の小皿はその多くが東濃型であり、時期は生田窯様式、15世紀後半頃のものである。遺構もその時期の土坑と考えられる。

遺物

第36図-30～57の遺物は中世土師器皿(30～46)、山茶碗類、(47～54)、古瀬戸(55、56)内耳鍋(57)が見られた。中世土師器皿は底部に糸切り痕の見られない非ロクロ成形と底部に糸切り痕が見られるロクロ成形の2者が出土した。非ロクロ成形の土師器皿は、30～43のもので、鈴木氏の分類(鈴木 2005)で見るとC類第2型式とD類1型式が主を占める。しかし31の様に口縁部が強く外反するC類でも他型式に入りそうなものなども見られた。非ロクロ土師器皿の形状、特にC類の皿は供伴遺物である、山茶碗の皿に非常に形状が近似しており、あくまでも推論の域を脱し得ないが、土師器工人が山茶碗の形状を意識して作成していた可能性も考えられそうである。ロクロ土師器皿は44～46であり、底部と体部の内面の境が凹むもの(45)や緩やかに屈曲するもの(44、46)などが見られることから、鈴木分

類のB類に分類できるものと考えられる。供伴する山茶碗類には椀(53、54) 皿(47～52) などが見られ、すべて東濃型である。54の様な細い紐状の高台が見られる9型式に入る椀なども見られたが、53などの丸味を帯びた体部に高台のない皿形態となった、11型式、生田窯段階のものが主であり、小皿も扁平の形状のものが出土している。椀と小皿がセットで多量に出土していることから、遺構もまたこの時期のものと考えられる。古瀬戸は55の平椀と56の三足香炉などが見られた。平椀は体部外面の上方と内面に灰釉が施釉されたものである。57は内耳鍋である。耳の部分は厚く太い紐状となり、丁寧な作りとなっている。口縁部は外斜する。信濃型か。

SK68(第7、34、37図参照)

遺構

D11グリッドに位置する土坑である。SD14、15、SK67、SX2に切られる形で検出した。平面形は方形であり、長軸3.9m、短軸3.8m、深さ0.16mをはかる。堆積土は単層であり、遺物は散発的な出土で、意図的な様相は見られなかった。また遺構の深さも浅いことから、古式土師器甕、須恵器甕・杯B、甕、山茶碗、陶器、土師器皿など様々な時代の物と、様々な種類の物が出土した。そのことから遺物の多くは流れ込みの可能性が高い。

遺物

第37図-58～62の遺物は山茶碗類(58、59)、古瀬戸三足香炉(60)、鉢類(61)、卸し目付き大皿(62)である。山茶碗類は椀と皿であり、ともに東濃型で11型式15世紀後半のものである。古瀬戸は破片であり、古瀬戸後期頃に入るものである。

SK71.72(第7図参照)

遺構

E11グリッドに位置する土坑である。SK71はSK72を切り、SK72はSK66に切られる形で検出した。SK71は長軸が0.8m、短軸0.6m、深さ0.2m、SK72は長軸が0.7m、短軸0.6m、深さ0.4mをはかる。堆積土はSK71が単層であり、SK72は炭化物、焼土が含まれる3層からなる埋め戻し土であった。

遺物は濃尾型の土師器甕や須恵器などが出土し、他時代の遺物がさほど混在しないことから、この時代の遺構と考えられる。

SK74(第7、33、37図参照)

遺構

D10グリッドに位置する土坑である。SK73、76に切られる形で検出した。平面形は隅丸方形であり、遺構の大部分は調査区域外へ広がっている。長軸2.5m、短軸0.9m、深さ0.37mをはかり、底面は平坦である。壁際での周壁溝などは見られず、炉や竈などもなかった。堆積土は2層からなりこの層からは、炭化物、焼土を含む層であり人為堆積である。

遺物は上層では古式土師器甕や山茶碗の細片なども見られたものの、主は土師器甕や須恵器杯や蓋

であった。出土は散発的なものであり、遺構底面から若干浮いた形で確認した。

遺物

第37図-63～69は須恵器、土師器であり、須恵器は蓋、杯Aである。土師器は甕であった。須恵器(63、64)は扁平な天井部を持つもので、つまみは欠損していて、その有無は不明である。端部は断面三角形となり収まる。杯Aは底部がロクロヘラ切りとなり、体部下半はヘラ削りが施されている。口縁端部は丸く納め、体部は丁寧なロクロナデとなる。7世紀後半～8世紀代のものと考えられる。

土師器甕(66～69)は濃尾型の甕である。66は小型のものである。全般的にハケ目は粗く器厚は厚い作りであり、底部のみのものには有段接合の痕跡が見られる。8世紀代のものと考えられる。

SK77(第7、34、37図参照)

遺構

B7グリッドに位置する土坑である。SI7に切られる形で検出した。平面形は楕円形であり、長軸2.1m、短軸2.0m、深さ0.44mをはかる。堆積土は2層からなり、西から東へ斜めに厚みを持って堆積する人為的なものであった。底面は平坦を主としつつも、中心部分はやや窪む形であり、壁は直立して立ち上がる。

遺物は古式土師器S字甕や、土師器甕、須恵器蓋、不明鉄製品などが出土し、これら遺物の出土には意図的なものはなく、堆積土などからの遺物の混入と考えられる。

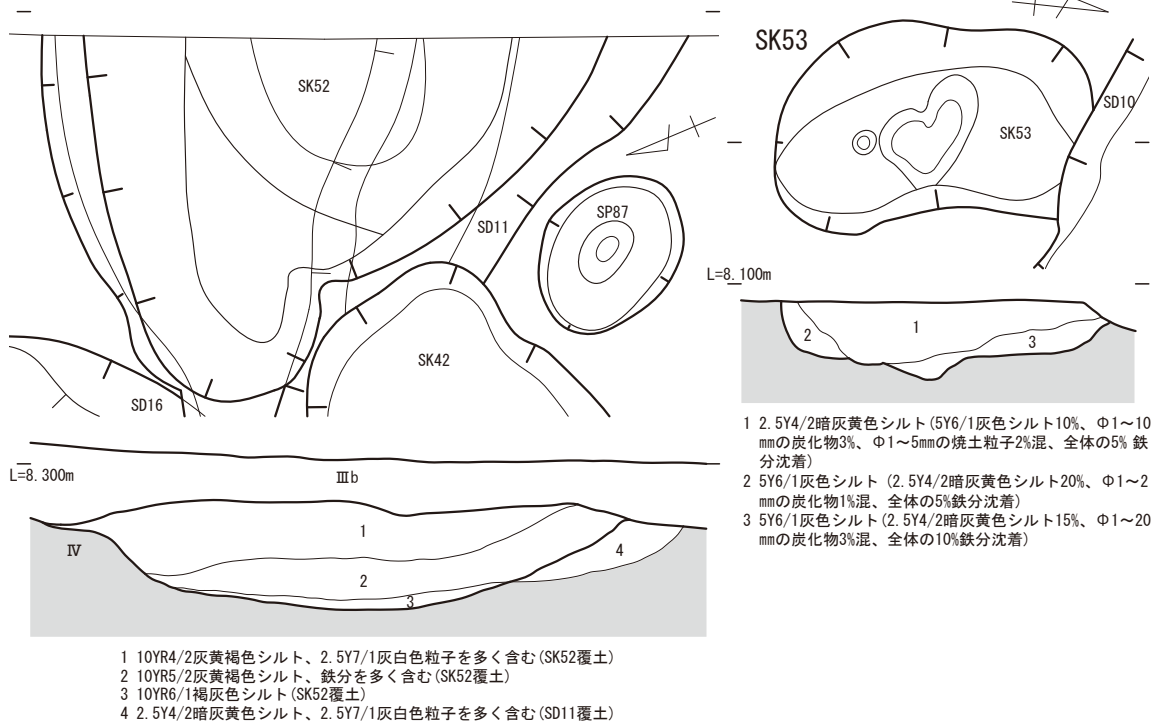
遺物

第37図-70～73は古式土師器、須恵器、土師器である。古式土師器はS字口縁甕(73)、有段高杯(72)が見られた。S字甕は口縁端部に面を持ち、頸部内面にハケ目、体部外面のヨコハケ目は頸部から離れておらず、形状は肩が張らない球形を呈している。赤塚分類(赤塚 1990)のB類、廻間Ⅱ式期頃のものと考えられる。有段高杯は器面全体に丁寧なミガキが施され、脚部には透かし孔が見られる。杯部と脚部の接する部分には明瞭な段が設けられ、逆八の字形に開く。この形と似たものは岩倉市小森遺跡でも出土しており、畿内系高杯として報告されている(早野 2006)。また知立市、小針遺跡でも廻間Ⅱ～Ⅲ式期への移行期の遺構であるSI9からも同様な遺物が出土している。廻間遺跡では、6、7期(廻間Ⅱ～Ⅲ式期頃)に畿内系の有段高杯が見られるとされ、この遺物も同様な時代が与えられるものと考えられる。70は須恵器蓋であり、端部は屈曲し丸く収める。71は濃尾型甕である。

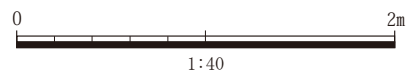
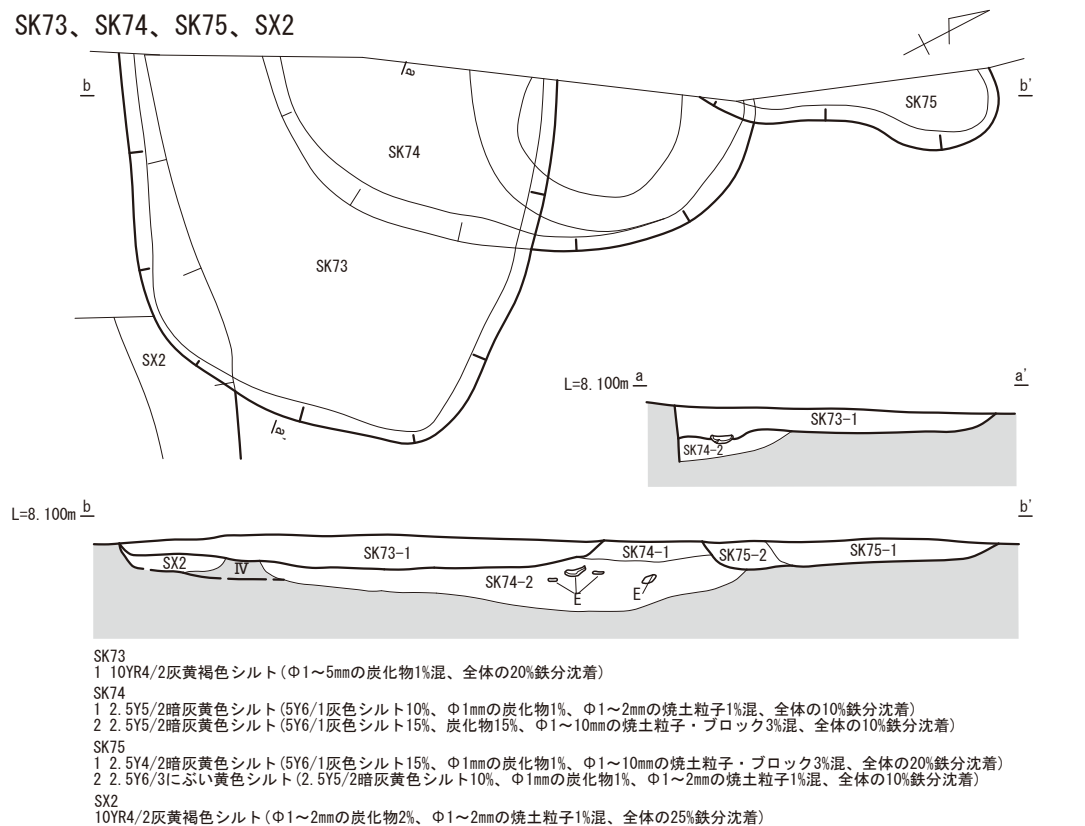


中街道遺跡 作業風景

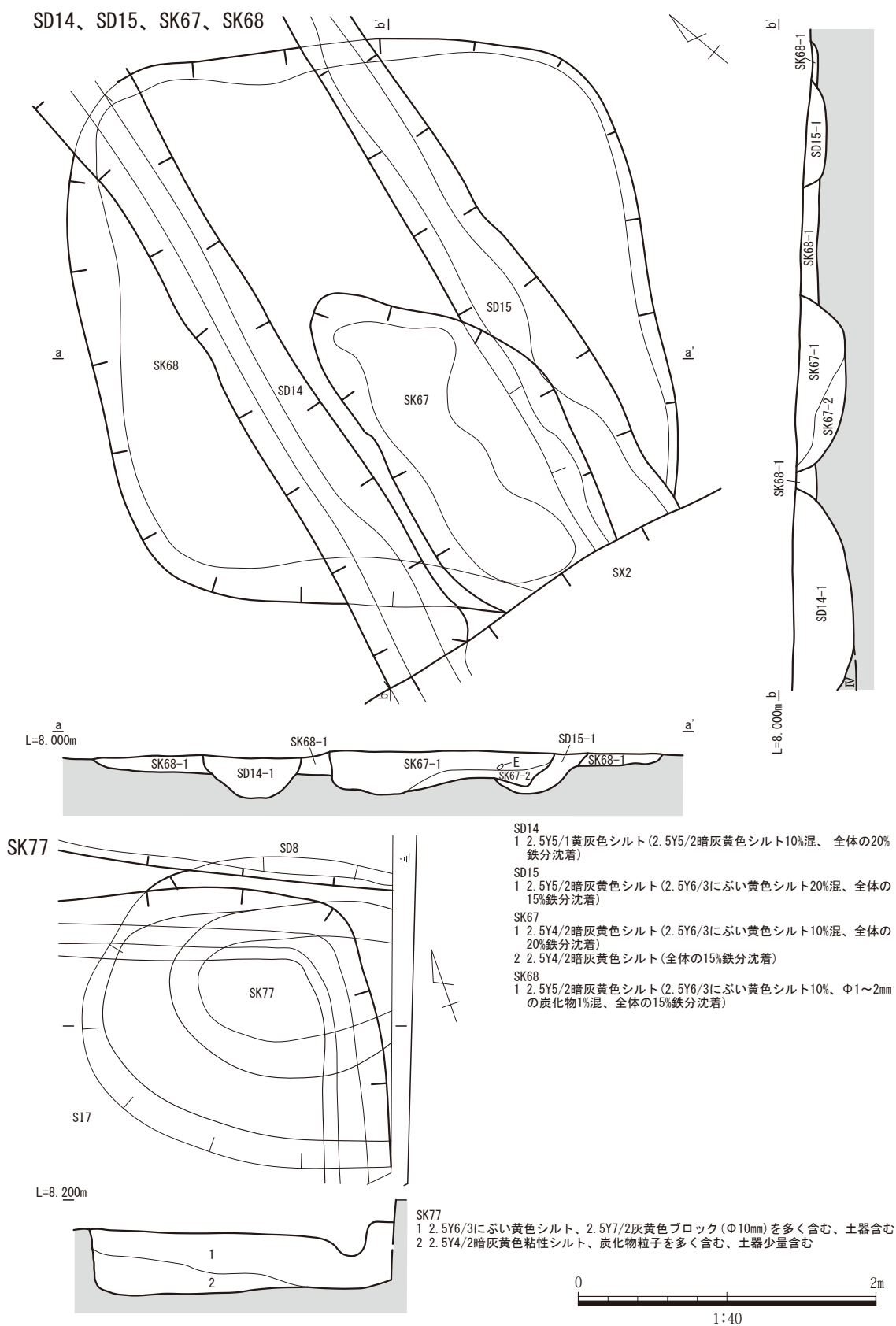
SD11、SK52



SK73、SK74、SK75、SX2



第33図 中街道遺跡 土坑遺構図 その1 (1:40)



第 34 図 中街道遺跡 土坑遺構図 その 2 (1:40)

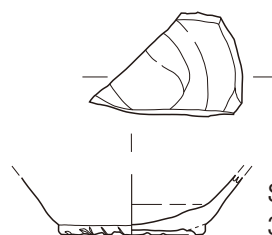
SK8



SK8
1



SK15
2



SK15
3

SK15



SK15
4



SK15
5



SK15
6

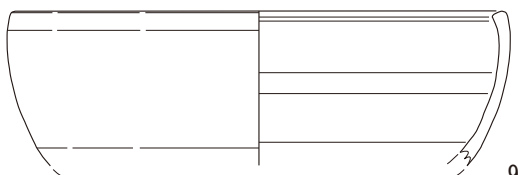
SK18



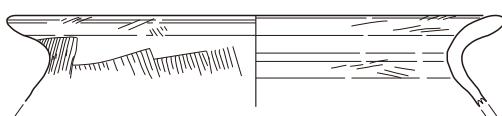
7



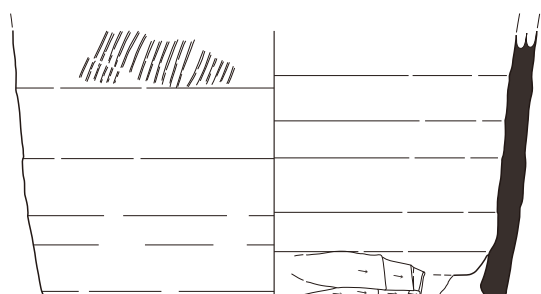
8



9

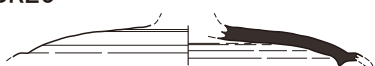


10



11

SK25



12



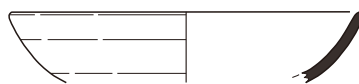
13



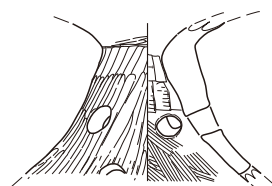
14



16



15



17

SK42

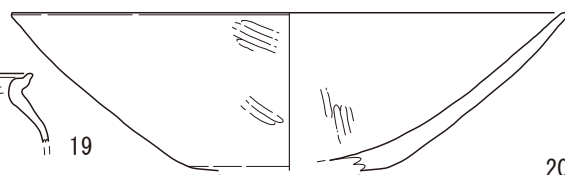


18

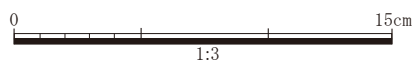
SK43



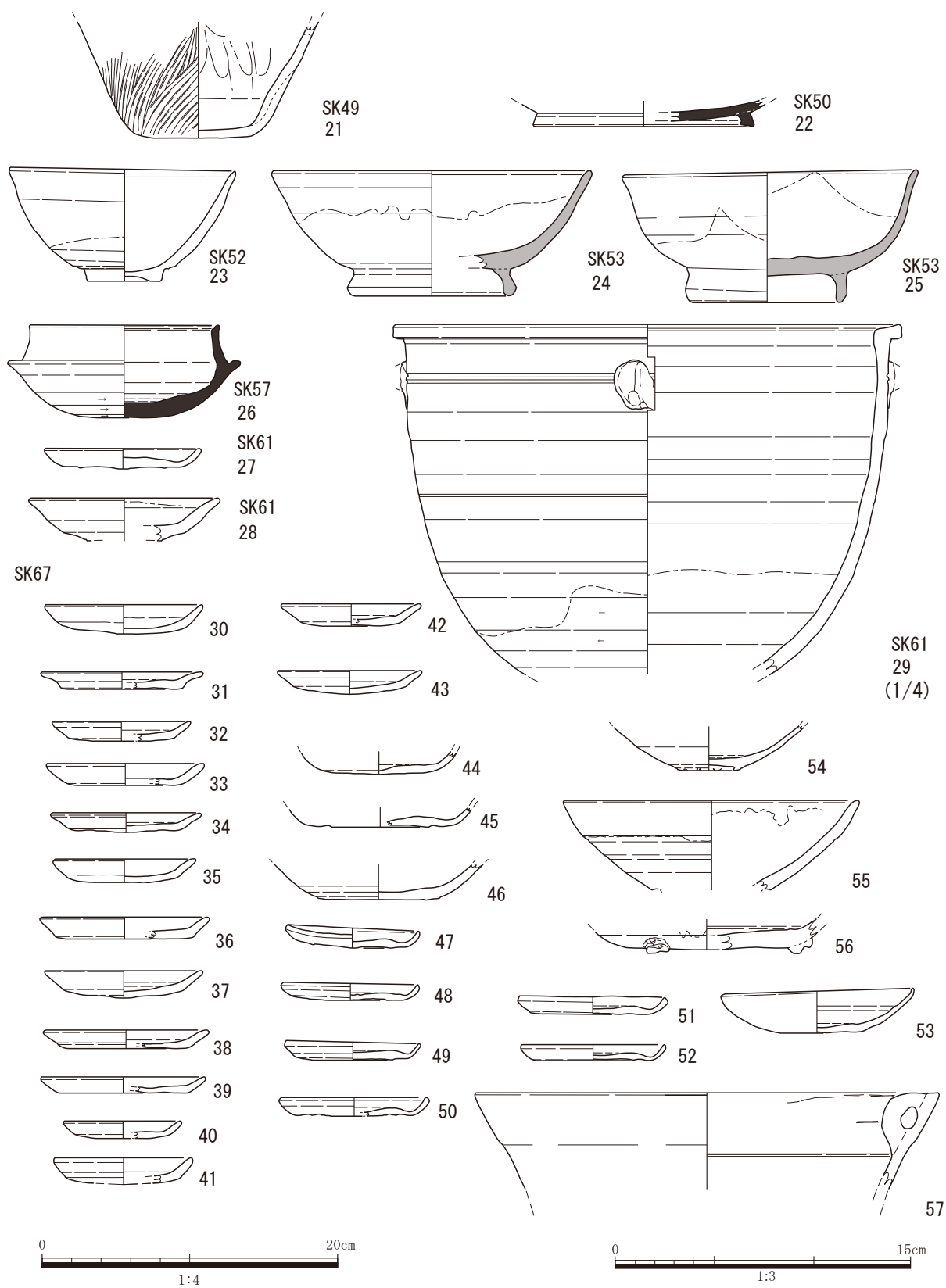
19



20

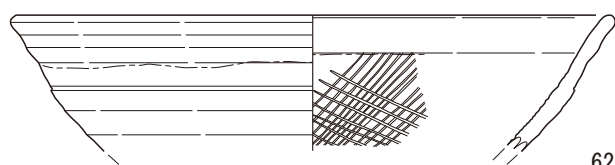
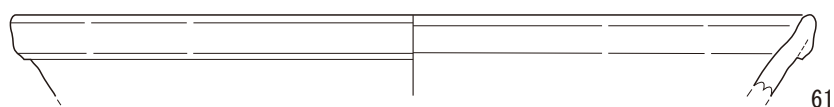
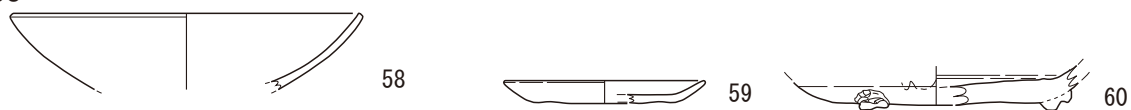


第 35 図 土坑 出土遺物実測図 その 1 (1:3)

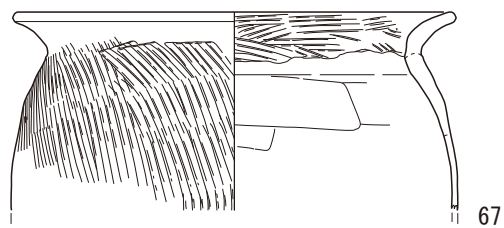
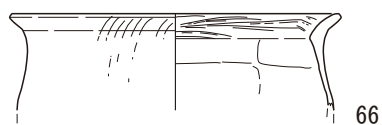


第36図 土坑 出土遺物実測図 その2 (1:3、1:4)

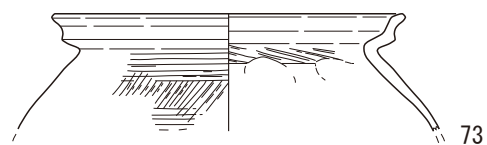
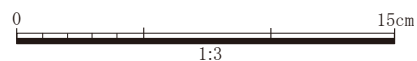
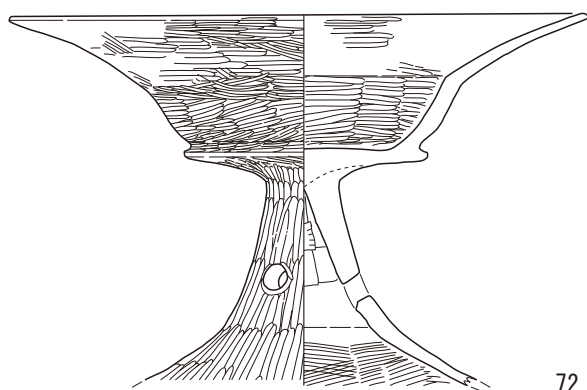
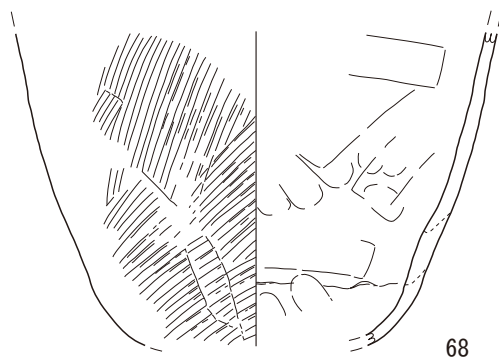
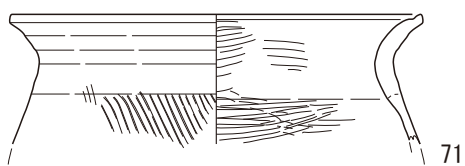
SK68



SK74



SK77



第 37 図 土坑 出土遺物実測図 その 3 (1:3)

井戸

井戸は2基検出した。いずれも遺跡の東側で確認し、素掘りであった。

SE1 (第7、38、39 図参照)

遺構

C13 グリッドに位置する井戸である。SD6- aに切られ SK21 を切る形で検出した。井戸の掘方は楕円形であるが、その外側には平面形が方形の浅い段を設けていた。外側の方形の浅い段の部分は長軸が3.5 m、短軸3.0 mとなり、井戸掘方部分は長軸2.9 m、短軸1.9 mをはかる。この方形の浅い段からの井戸枠などの出土はなく、井戸材などの残欠も見つからなかったが、井戸掘方の壁面は、ほぼ垂直に近く方形を意識して造られていた。底面は平坦であり、砂利などが敷かれた痕跡などはなく、また水溜用の曲物なども出土しなかった。堆積土は人為堆積であり、埋め戻し土である。

遺物は1層などの上層からは、山茶碗類などが出土していたが、下層からは主として須恵器杯や蓋、壺、甕、土師器甕、木製品などが見られた。特に最下層からは、井戸の祭祀に使用されたと考えられる紡織具の栳の腕木と斎串、さらに須恵器杯H蓋が出土した。これら遺物から7世紀後葉～8世紀前葉頃の井戸と考えられる。

遺物

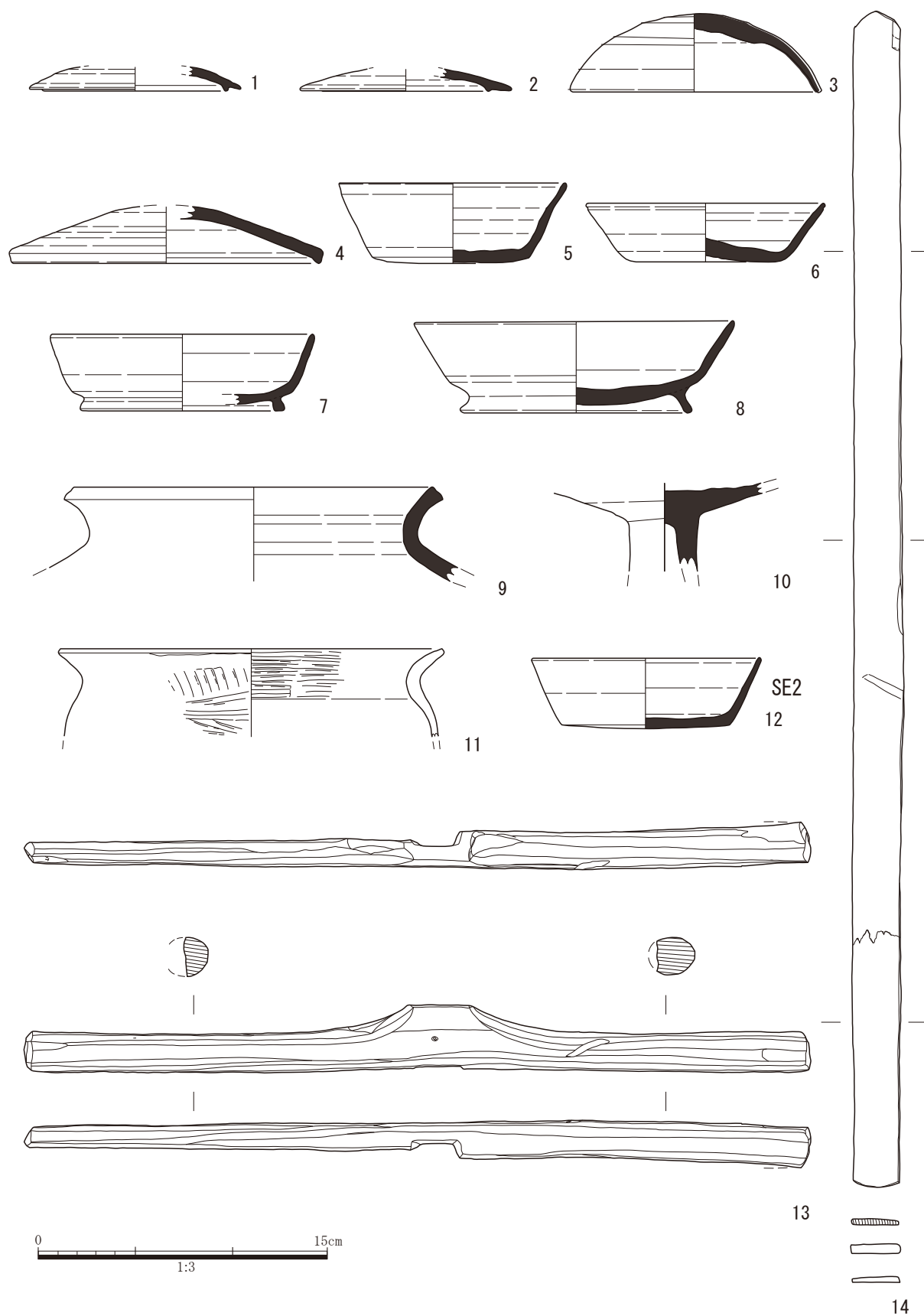
第39図-1～11、13、14は須恵器、土師器、木製品である。須恵器は蓋、杯A、杯B、甕、高杯である。蓋は径が小さく、かなり緩くなったかえりの付く蓋(1、2)や天井部にはへら削り痕が見られ、球形を呈し、稜が不明瞭な杯H蓋(3)、つまみ蓋(4)などが見られる。杯は箱形の様に直立して底部から立ち上がる杯A(5)や浅身のもの(6)などが見られ、杯Bの口径は大きく、高台は短いもの(7)や細長く外に張り出すもの(8)が見られた。須恵器は総じて7世紀後葉～8世紀前葉頃のものと考えられる。木製品は栳の腕木(13)、斎串(14)が出土している。栳の腕木の表面には形状を作り出した時に付いた加工痕が見られ、一回の刃の移動が長いことから、刀子や小刀的なものや、小型の槍鉋などの道具による加工の可能性が考えられる。また遺物はほぼ縦に半裁されていた。祭祀用に加工したのであろうか。斎串は片側の先端部が山形に加工し、もう1方はやや丸く収めている。表裏ともに墨痕はなく、薄作りとなっている。

SE2 (第7、39 図参照)

遺構

B14、B15 グリッドに位置する井戸である。SX2に切られる形で検出した。井戸の掘方は楕円形であり、長軸1.5 m、短軸1.3 mをはかる。井戸内から井戸枠や、その残欠などは出土せず形状はSX2に井戸の上部が削られて消失しているものの、SE1と近似している。

遺物は若干の混入遺物も見られたが、下層より、須恵器杯A(第39図-12)などが出土しており、SE1とほぼ同時期の7世紀後葉～8世紀前葉頃の井戸と考えられる。



第 39 図 井戸 (SE1、2) 出土遺物実測図 (1:3)

不明遺構

SX1 (第 7、40、41 図参照)

遺構

C18 グリッドに位置する不明遺構である。遺構の大部分は、後世の攪乱によって大きく削平を受けており、全体像は不明である。平面形は方形であり、確認できた範囲での規模は長軸 2.8 m、短軸 0.7 m、深さ 0.6 m であった。底面は平坦であり、壁面は緩やかな傾斜で立ち上がっていく様相であった。堆積土は 2 層からなり、自然堆積土であった。

遺物は須恵器なども見られたものの、主は山茶碗類、青磁細片などであり、中世の遺構である。

遺物

第 41 図 -1、2、3 の遺物は須恵器杯 B、山茶碗類である。須恵器杯 B は、底部のみの出土であり、高台の端部は細くなり、開き気味に接地する。山茶碗類は小皿であり、2 の底部には回転糸切り痕が見られ、厚く高台状になっている。底部から口縁端部へは外反し、体部中位で屈曲して内湾する。5 型式、12 世紀後葉～13 世紀初頭頃と考えられる。3 は皿であり、浅身となる。7～8 型式、13 世紀中葉～14 世紀初頭頃と考えられる。

SX2 (第 7、42～45 図参照)

遺構

中街道遺跡の南東部分から北西方向にかけて、調査区を斜めに横断する不明遺構である。SD13 に切られる以外は、すべての遺構を切って検出した。全長 56 m、幅 8.0 m をはかり、B14 グリッド付近で L 字状の食い違いになっている部分が見られたものの、ほぼ直線に配置している。底面はやや深い皿状となり、調査区南東側では両側面にはテラス状の平坦面を設ける形状が見られ、それが北西側では、テラス状の平坦面は見られなくなる。SD7 とは軸方位や遺構の形状が類似する点が多く、直接的な結合点は確認していないが、同一の遺構となる可能性が考えられる。堆積土は南東側では、遺構の外側から人為的に順次埋戻しを行っていたことを確認した。底面での砂層の存在などといった、水流の存在が確認できる堆積は見られなかった。また埋め戻し土の堆積が最下層にまで及んでいる事などから、SX2 を造作して、さほど時間を経ない段階で埋め戻されたか、底さらえが何度か行われていた可能性が考えられる。

本遺構は基本的には遺物包含層のⅢ b 層直下での検出となるものであるが、B12～14 グリッド付近の地点では、遺物包含層のⅢ b 層を切り込む箇所が見られた、ここからは江戸時代前期の陶胎染め付け皿などが出土した事などから、近世に至っても部分的に埋まりきっていない、または再掘削した範囲が存在していた事がわかった。

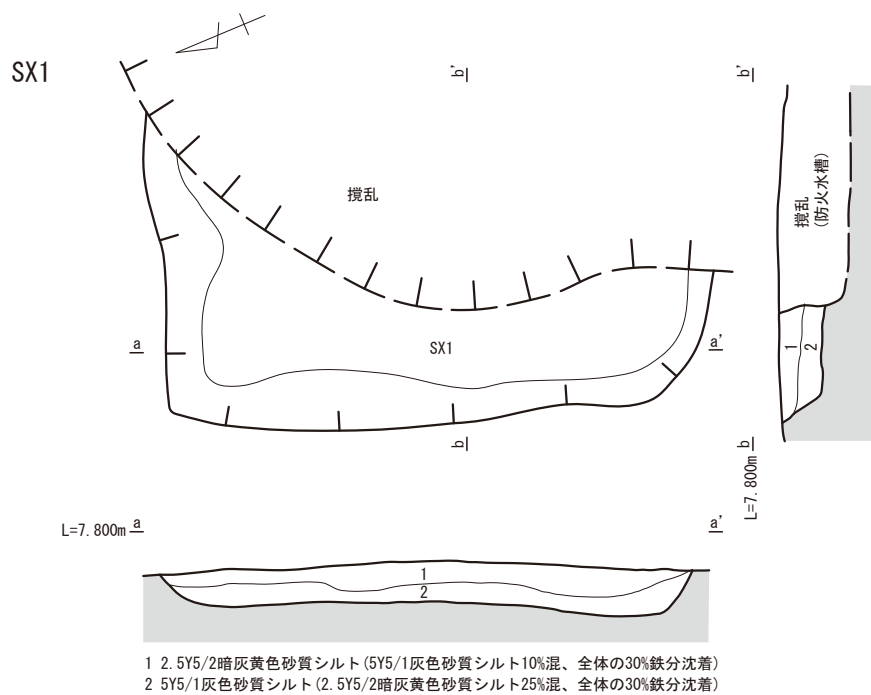
遺物は遺跡のほぼすべての遺構を切っている関係もあり、多時期に渡って出土している。その出土には、規則性などものはなく、散発的な出土がほとんどであった。また遺物の完形品の出土は少なく、多くは破片の出土であり、破片の接合率も悪い。遺物は古式土師器甕、高杯、須恵器、灰釉陶器、山茶碗類、古瀬戸、陶器などが上層から最下層まで万遍なく出土する状態であった。その状況から、埋め戻し土内

に混入していた遺物が、ほとんどであろうと考えられる。

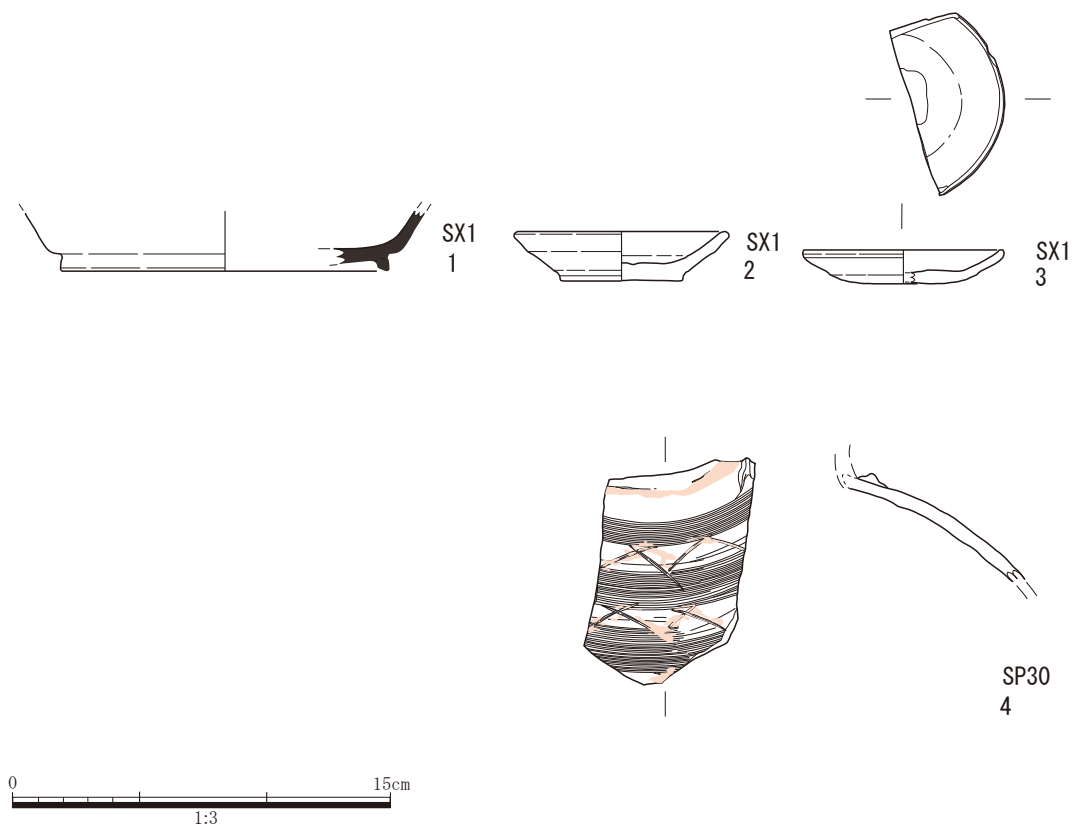
遺物

第 43 ～ 45 図 -1 ～ 52 までの遺物は、古式土師器、須恵器、土師器、山茶碗類、灰釉陶器、古瀬戸、中世土師器皿、内耳鍋、施釉陶器、陶胎染付など多種、多様な時代の遺物が出土している。古式土師器は数こそ少ないものの、出土している (16、17)。特に 17 はパレススタイルの壺であり、有段口縁状を呈する。口縁部は外傾し、垂下は消滅している。口縁内面の羽状文は単純化しているなどの点から廻間Ⅱ式頃のものと考えられる。S 字口縁甕も時期は廻間Ⅱ式頃と考えられるものであり、口縁部には粗い押引刺突文が入る。A 類の新段階頃の遺物であろうと考えられる。須恵器は蓋、杯 B を中心に高杯、甕なども見られた。時代も 7 世紀後半～ 9 世紀代までと幅広い。土師器甕 (15) は濃尾型甕であり、頸部から粗い刷毛が入る。中世の遺物は山茶碗類が出土量として多く、4 ～ 5 型式の椀 (18、19、20、21) から東濃型の 8 型式頃 (22) のものや、また東濃型の 15 世紀前後の一群 (23、24、25、26、27、28) など見られた。中世土師器皿 (32、33、34、35) は少量ではあるが見られ、底部にはロクロ糸切り痕が見られないものであった。口径は 6 cm 前後と小さく、口縁部にヨコナデを施すもので、鈴木分類 (鈴木 2005) の C 類に該当するものと考えられる。また 35 の底部には墨書されたものも見られた。内耳鍋 (36) や羽釜 (37) などは半球形の体部を持ち、内耳は棒状工具で作られているものであった。底部には煤痕が見られる。羽釜は口縁部片であり、口縁部周辺には煤が付く。38 は天目茶碗である。鉄釉を施釉し体部下半は露胎となる。口縁部は外反や屈曲などはすることなく、球形のまま端部に至る。39 は白磁の底部片である。高台は削り出しであり、椀Ⅱ類、12 世紀代であろうか？

古瀬戸も出土しており、31 の灰釉四耳壺の様に古瀬戸前期の遺物も見られたが、遺物の多くは 14 世紀後半、古瀬戸後期からのものが多い。40 は灰釉卸し皿。41、42 は灰釉皿であり、15 世紀代のものである。43 は灰釉平椀であり、底部は欠損していて不明である。体部は直線的に口縁部へ向かい、口縁部は内面へ屈曲する。古瀬戸後期、15 世紀代と考えられる。44 ～ 46 は古瀬戸のすり鉢である。44、45 は口縁部内面に突起が見られるものであり、卸し目は確認できなかった。46 は口縁端部が内側へ若干屈曲気味となるものであり、大窯Ⅰ期頃のものと考えられる。47、48 は陶胎染付皿である。47 は体部内面に唐草文と見込みに梅花を配す。48 は体部外面に二条の直線と花？の文様が見られる。17 世紀代のものと考えられる。49 は古瀬戸の壺、50、51 は外耳壺である。50 は所謂「お歯黒壺」であり、口が耳と一体となった美濃地域でよく見られる形のものである。体部外面には錆釉がかかる。17 世紀代のものである。51 は全体的に遺存状態が悪い。釉薬の残りも悪いものの体部外面には錆釉が掛かっていた痕跡が見られる。肩部には紐状粘土による耳が付く。52 は陶丸である。

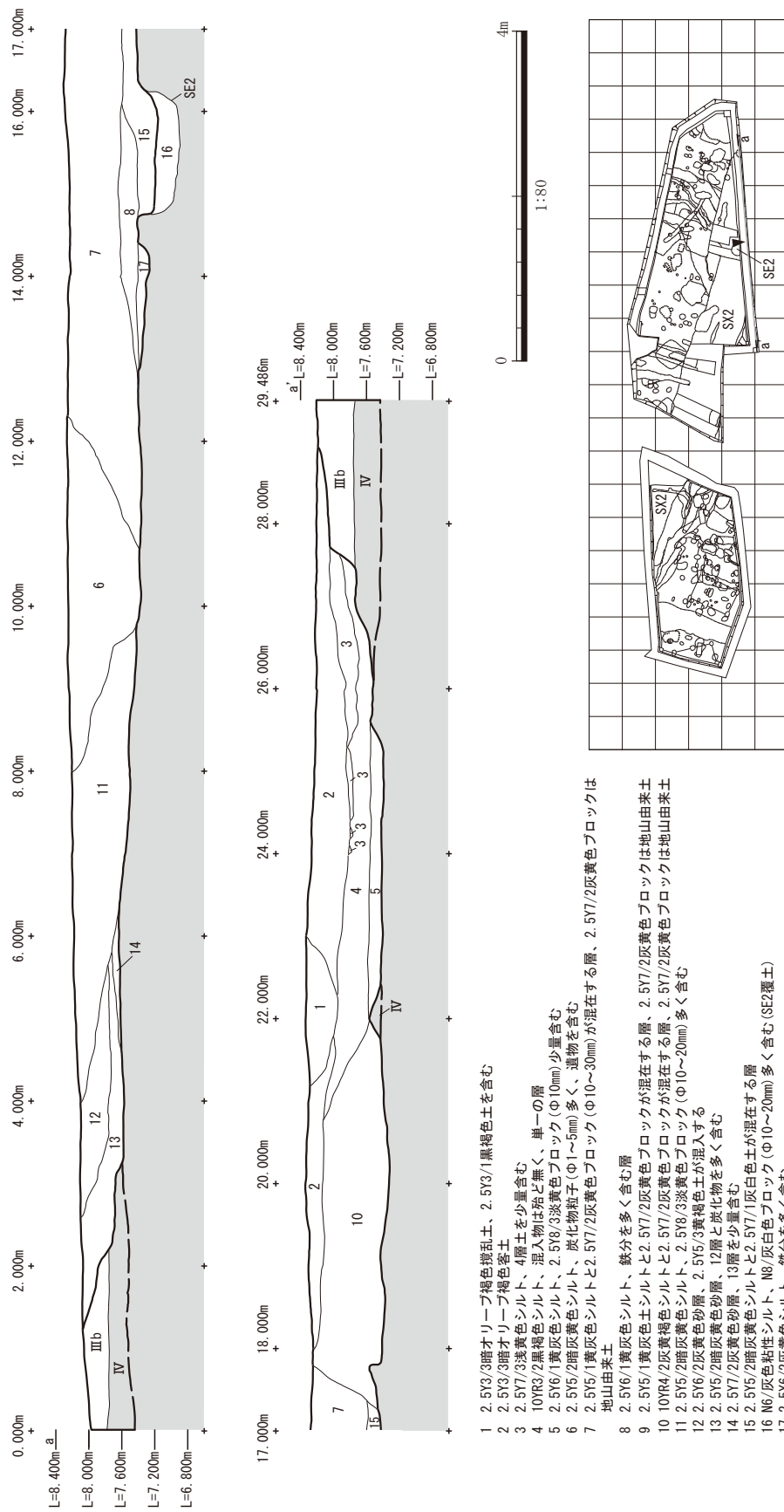


第 40 図 SX1 遺構図 (1:40)

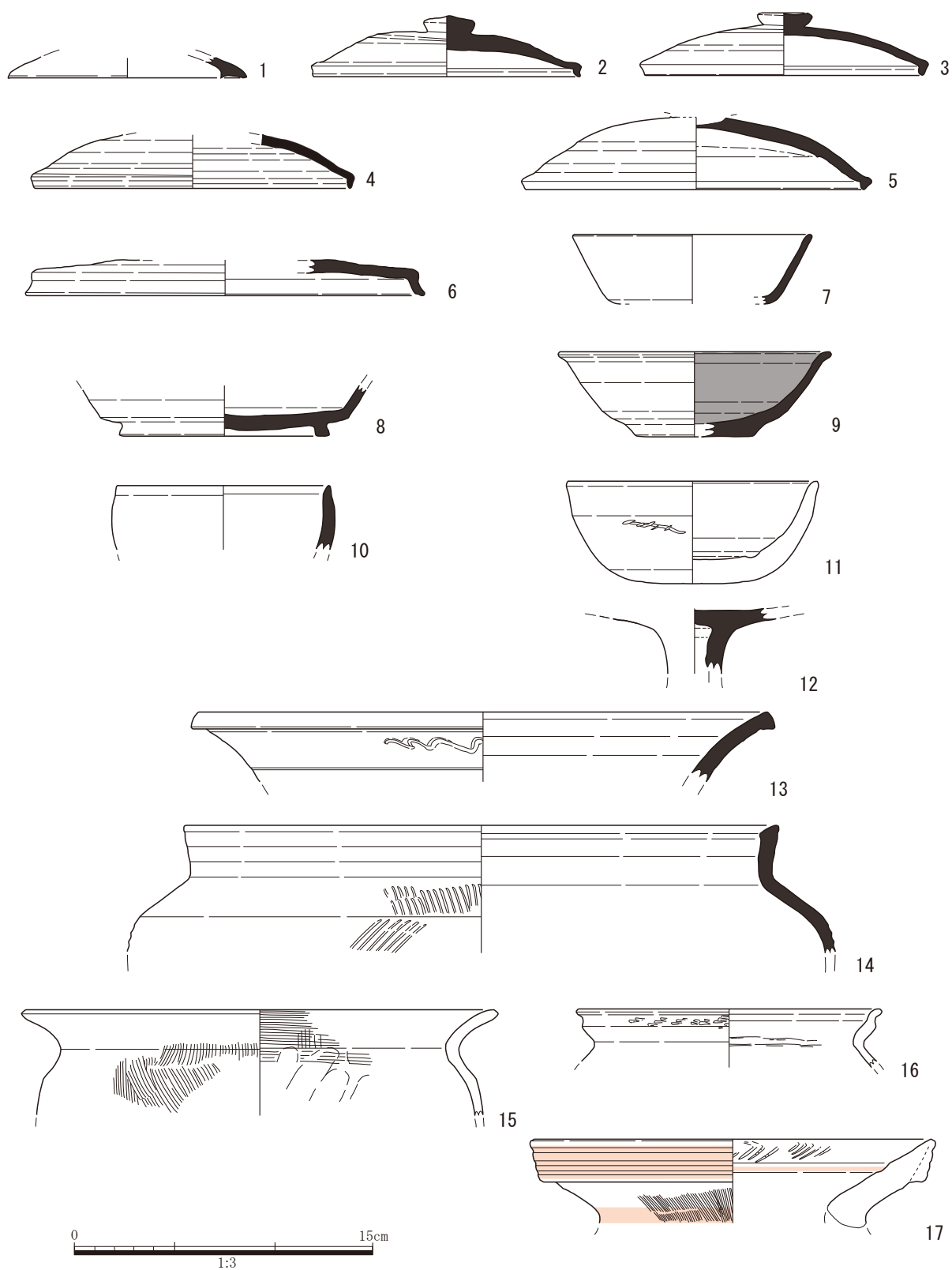


第 41 図 SX1、SP30 出土遺物実測図 (1:3)

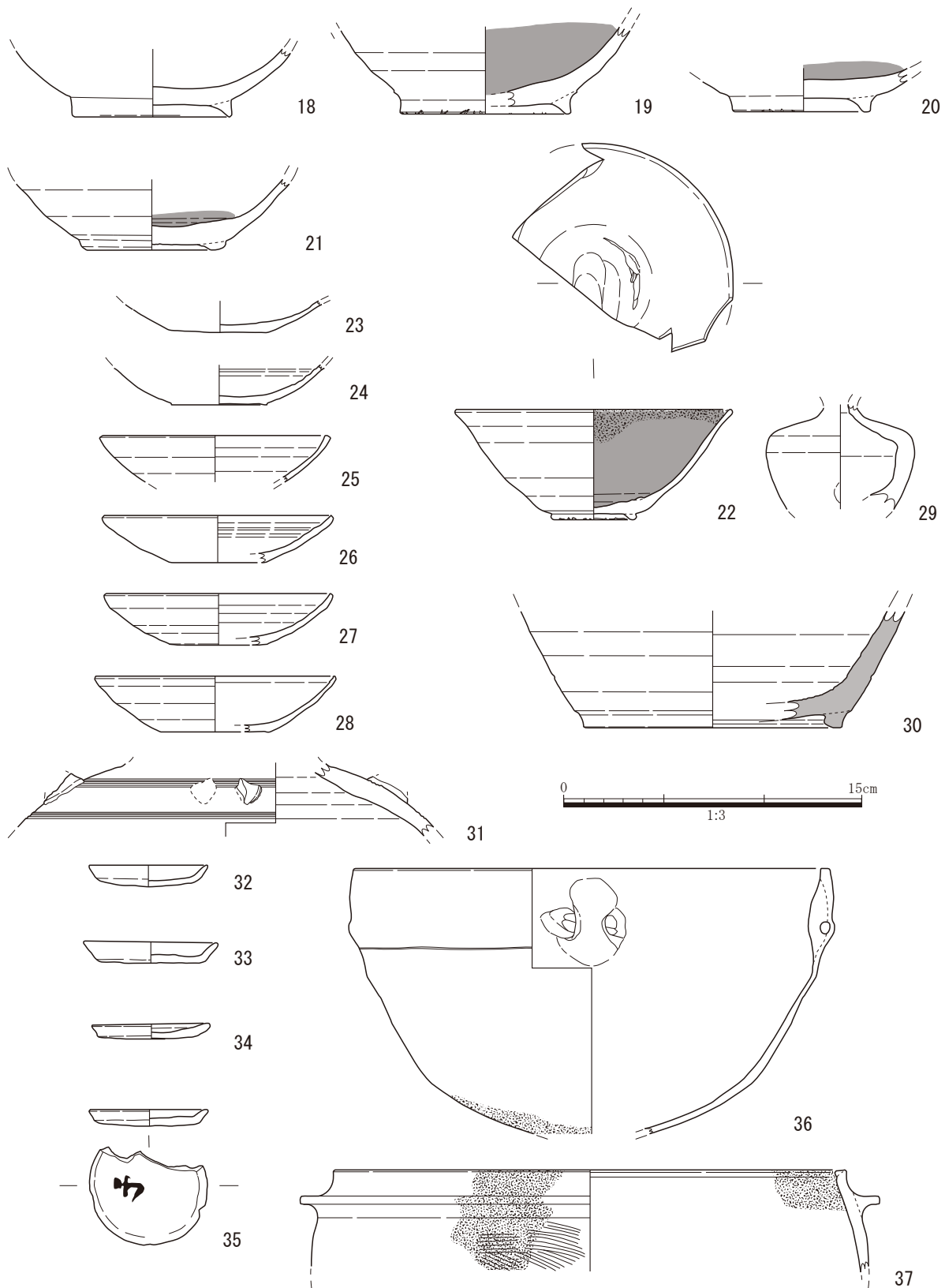
SX2、SE2



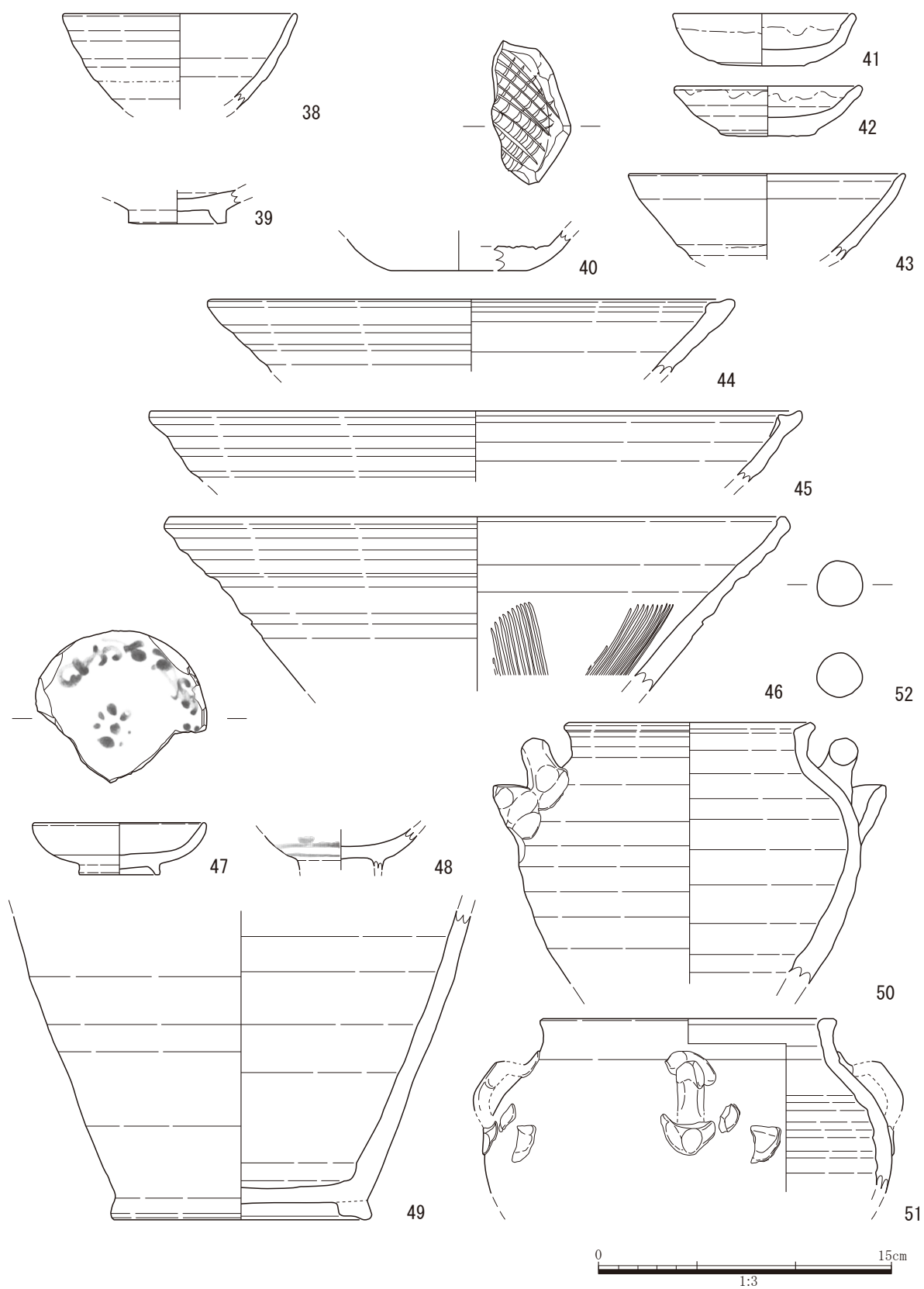
第 42 図 SX2、SE2 遺構図 (1:80)



第 43 図 SX2 出土遺物実測図その 1 (1:3)



第 44 図 SX2 出土遺物実測図 その 2 (1:3)



第 45 図 SX2 出土遺物実測図 その 3 (1:3)